
転生した先は...リボーン！？

霧宮 海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生した先は…リボーン！？

【Nコード】

N7854W

【作者名】

霧宮 海

【あらすじ】

ある日、オレ、霧沢蒼は倒れた。そして目が覚めたら真っ暗な空間。そして変な男。その男はオレにこう言ったんだ。「あんた…死んだぜ？」それがすべての始まりだった。オレはなんだかんだでリボーンの世界へ行くことになり、生活をやり直すこととなった。しかもなんかオレ以外にも転生者がいる！？これからやっていけないかなオレ…。さてさて彼女が見るのは天国なのか、地獄なのか。

登場人物

登場人物

霧沢 蒼（キリサワ アオ）

性別：女

ファッション：黒のフード付きパーカの下に白いタンクトップ、迷彩柄の七分丈ズボン。

銀のチョーカーがお気に入り。

髪：黒で胸くらいまで。だいたいポニーテール。

身長：165cmくらい

一人称：オレ

性格：クール。でも仲間と認めた者には気さく

好きな性格：決めたことはやる人。仲間を大切にする人。癒し系の人。

嫌いな性格：熱血君。偽善者。

帝（ミカド）

性別：男

髪：フツの髪型↑雑ですいません。 明るい茶色

身長：170cmくらい

性格：明るい、意外と世話焼き。

好きな性格：ノリが良い人。

嫌いな性格：ムスツとしてる人

浅野 望（アサノ ノゾミ）

性別：女

髪：ボブ。焦げ茶っぽい色。

ファッション：かわいい系。常にスカート

身長：155cmくらい

性格：明るい。みんなと仲良くなりたい。漫画リボーンが大好き。

好きな性格：みんな好き！

第1雨

オレ、死にました

あー。こんにちは。霧沢蒼です。ただいま人生の危機です。マジで笑い事じゃなく。

オレ…五日間何も食ってないんすよ。

いやね？ダイエットとかじゃなくさ、親が仕送りしてくんねーんだよ！

一人暮らしの蒼に仕送りなしはきつい。

もうちょっとで家かー！。うー。水ー！水飲んでー！夏暑すぎだろ今年！

…あれ？なんか視界が…逆さま？

???蒼はその場に倒れ込んだ??

「い。おい！おい！」

「うぉあ!？」

蒼が飛び起きる。オレの目の前には男。待て。状況が把握できない。なんだこいつ。

なんかすんげー神サマみてーな格好してる。てかここドコ？ 周り真っ黒で現実味ねー。

ボーゼンとしている蒼を前に男がバツが悪そうに言う。

「あー…。なんかパニクってる途中悪いけどさ。アンタ死んだぜ。」

蒼、固まる。男、引き笑いし、斜め上を見ながらポリポリ頭をかく。

「はあああ————！？」

ドコだかわからない空間に蒼の声が響く。

「ち、

ちよつと待つてよ。死んだ！？death？die！？そんな、空腹で死ぬとか…情けない…」

「まあ、どんまいだ！」

そう言い、男が蒼の肩に手をかける。

「黙れ！おまえにオレの気持ちがかかるか！最後の晚餐がパンのミニ…せめてご飯が食べたかった…！」

うなだれる蒼。

「なあ、転成できると言ったらどうする？」

「は？」

「いや、同じ世界は無理だがオレの力を持つてすれば『家庭教師ヒットマンREBORN』の世界に行けるのだ！」

男が偉そうに言う。

「いや、いい」

「遠慮すんな」

「遠慮してねーし。『うぜーんだよ』」

「いやいや、え？フツーさ『リボーンの世界に行けるの！？マジラッキー』っていう反応が返ってくる

はずなんだけど」

蒼があきれた顔で答える。

「オレそのリボーンってやつ知らねーし。てかお前何？」

「『何？』つて…せめて『誰？』にしてほしかった…まあいい！オレは神のひとり帝だ！」

帝が言い放つ。蒼は別に驚きもせず腕を組んで立っている。

「ふーん。」

「…もつと驚こうよ」

「驚いてるよ？神サマっていったら七福神みたいなじいさんしかないと思ってたから」

「いやそつちじゃなくて…」

今度は帝がうなだれる。

「別に死んだらしいし？そんなのがわかるんだったら本当だろうよ。話を戻す。オレはそのリボーン

の世界には行かない。」

「行かなくちゃいけねーんだよ」

帝は急に真面目な顔になる。行かなくや行けねーって、んじゃ聞くなよ！…まあ続きを聞いてみよう。

「なんで行かなくやいけねーんだ？」

「まあながくなるんだが、お前があのととき死ぬはずじゃなかったからだ。お前はあの後家に着き、ポスト

を見ると親からの手紙とお金を見つけるんだ。んで食いもんを買う。でもなんでか死んじまった…」

そういう場合は他の世界でやり直さなきゃならねーっつーわけ。まあオレも行くし安心しろ！」

不安にしかなんねーよ。

次の瞬間とある部屋にいた。

「ここがオレらの家だ！もちろん他にも部屋はあるぞ。ここは蒼の部屋だ。」

「へー。ほぼモノクロの部屋か。気に入った。」

「そら良かった。この世界ではオレらしいとこっていう設定だからよろしくな」

「ああ。」

「そーだ。これ。」

そう言い帝が渡したのは…メガネ。オレ視力確か1・7はあるんだけど。

「オレ視力には自信あるんだけど。」

「フッフッフ。ただのメガネじゃないのだよ、蒼くん。それはパソコン、原作漫画、地図などなど…

様々な機能がついてるのだよ！」

なにそれ。ドラ もん的なアイテム？

「は？イミフリー」

「んー。じゃあ『リボーン』の原作が読みたい』って思ってみ」

…うわ。なにこれ。物語が頭ん中に入ってくる。その後2、3分でオレはすべての話を理解した。第一の感想。

「…これ。オレまた死ぬだろ」

「だいじょーぶ！策はある！」

さっきのメガネは確かにスゴかったけど今度はどうだなー。

「なんと！蒼の戦闘能力、運動能力がアップしているのだガハッ
ッ」

ドンッッッ！！

説明しよう。帝が自慢げに話している途中に蒼が帝にドロップキックをかましたのだ。

「あーほんとだわ。壁にヒビはいつてる。アンタほんとに神かも」

「（神サマにドロップキックしてもいいんですか？）」

？？その後帝復活？？

「蒼。明日から学校だからもう寝ろ。制服はなんか前の世界で男用着てたからそっち貰つといたぞ？」

「助かる。スカートなんて履けるかっての。」

帝が部屋を出て行く。

蒼がスカート履いたら結構かわいいと思うんだけどなーと思った帝だった。

第1雨

オレ、死にました（後書き）

リボーンの人たちが出てきてなくてごめんなさい！次はきっと出ます！…たぶん

第2雨 オレ、初日から遅刻――！？

ピピピピッピピピピッ

なんだよ、うるせ？な――
寝返りをうつ。

ピピピピッピピピピッ

「うるせーってんだろーがぁ！」

バキッ

「あ。壊れた。」

哀れな目覚まし時計よ、安らかに眠れ……

ちょっと待て。オレはいつも授業の始まる10分前に目覚ましが鳴るように設定している。
↑おい。

……てことは……遅刻だぁ！！！！

急いで制服を着、髪を結び、黒の半袖パーカを着、荷物を持って飛び出した？？？

ダダダダダダダダダダダッツ

くっそー！帝のやつ起こしてくれても良ーじゃんよお！

「覚えてる???」

あ、校門が見えてきた！門は…閉まってるー！飛び越えるしかねーな。そんでたしか教室はあの辺！

二階くらいだったら飛べんだろ！奇跡的に窓も開いてるし？こっから入ってくれて言ってるようなもんだろ？

門の前になんかいる。腕に腕章？まあいーや。

飛び越えようとした時、話しかけてきた。

「君、待ちなよ。」

「わりい、急いでんだ、よっ！」

門に乗り、一気に蹴る。

スタッ

「フー、着地成功！」

うまく窓の所に着地できた。正ー直うまくいく自信がなかった。あ、クラスの人たちびっくりしてる。

帝は…あきれてる。

どーしよ。何言えば良いかわかんねー。

「あー。遅刻してすんません。霧沢蒼です。一応女です。オレの席はどこですか？」

キヤアアアアーーーーー!!!!!!

女子たちが一気に沸き立つ。うるせー、なんだってんだよ。

「先生！私の横！私の横空いてます！」

「こっちだつて空いてます！」

騒ぎだした生徒たちの声でようやく我に返り、生徒を静める。

「静かにしなさい！今日は本当に転校生が多いな…。霧沢は獄寺の横がいいな。」

獄寺…ああ爆弾野郎か。

「うーい。」

そう言い席に向かう。他の生徒からはブーイング。
先生もかわいそーに。

席に着き、うつ伏せに寝る。獄寺がこんな感じってことはもう沢田の下についた後か。見学しようかと思ったのに。

さつきから何なんたる。獄寺がずっと睨んでんだケド…。視線が背中刺さるゝ痛いよー。

授業中ずっとこんな感じかよ？

「あー今日は転校生がいるからー、二時間目は自由時間だ！教室内だったら遊んだりしゃべっていいぞ！」

生徒がまた沸き立つ。たしかにこの様子じゃみんなメモ回しまくって授業にならねーだろ。

先生ナイス！獄寺の視線から逃げ出せる！…そして帝にもちよつとだけおしおきしないとね？

蒼が席を立つ。ふいに腕がつかまれる。獄寺だ。

「なんだ？何か用でも？」

「昼休み、屋上に来い。」

それだけ言っと、沢田の方に歩いていった。なんだ？かつあげ？イジメ？まあ行くっきゃないよな！。

それより今は……………帝君の方だね」

帝も転校生だから生徒たちに囲まれている。ちょっと邪魔。

「はいはいごめんねー。ちょっと通してねーはいつ失礼」

生徒をかき分け帝の真正面に立つ。帝、冷や汗だらだら。

バンッ！！

机を叩き、満面の笑みで問いかける。

「帝クーン？どゆこと？起こしてくれてもいいーじゃんよお！」

その言葉で一氣にざわつく。え。なんか変なこと言ったか？帝は頭を押さえ、またまた呆れ顔。

「なにそれ、二人知り合いだったの？！」

「てゆーか同居！？」

「同じ部屋で寝てたりして！」

…なんでそーなる。皆さん妄s…いやいや想像力ありすぎ。

「ちがうちがう。オレらただのいとこ。オレの親たちが死んだから帝の家に住んでんだ。それだけ。」

みんながっかり。変なもん期待すんなー。まあそんなことどうでもいい。オレはもう一つ聞きたいことがあんだよな。

帝の襟を掴み、帝にしか聞こえない声の大きさで言った。

「おい。どういうことだ。『浅野望』なんて知らねーぞ。あんなやついなかっただろ」

そう、原作にはいないはずの人間がもう一人いたのだ。

「あーばれた？だつてさ、一年間も『リボーン』の世界に行きたいです」とか願われてさ他の神サマから

も『叶えてやれよ』とか言われて！耐えきれなかったんだよ！」

…アホか。なんかもーいや。めんどくさい。

「もーいーよ。アンタに聞いたオレが馬鹿だった。」

そう言つて蒼は自分の席に戻り、寝た。

??昼休み??

↑すいません!

屋上に来いつて本当なんだろ。

蒼は屋上へ向かっていた。学校の地図は大体頭に入っている。

ガチャ

ドアを開ける。獄寺はもう来ていた。相変わらず睨みつけてくる。

「何の用?もしかしてかつあげ?オレいま野口サン二人しかいないんだけど。」

とりあえず笑って話しかける。

「しらばつくれんな。テメー何処のファミリーのもんだ！」
あーそういうこと。

「んー。ただの一般人でーす」

「二階の窓から入ってくる一般人がいるか！」

…ごもつとも。

「じゃあどうすれば信じてもらえんの？」

「オレと戦え！何処のファミリーかも知れねえやつを十代目のお側に置けるか！」

それってボコられたら信じるってこと？まあケンカは好きだから受けるけど。

「いーよ。そっちもダイナマイト使っただしこっちも武器使ってい
いよな？」

「かまわねえ」

蒼が帝に貰ったクナイを出す。

「これでアンタを刺すことはないから安心しな。消火用だ」

「なめんな！2倍ボム！」

うわ。いきなり攻撃してきた！ホント何処からあんなにダイナマイ
トだしてんだろ。

四次元ポケット？

「うかせ
雨風！」

蒼がクナイを放つ。

「なっ！嘘だろ…」

獄寺が投げたダイナマイトの火がすべて消えてしまったのだ。そしてダイナマイトは失速しポトポトおちる。

「…これで無駄だったことがわかった？」

「クソッ…」

獄寺が膝をつく。蒼は獄寺を見、屋上の柵の方に歩いていく。

「もう戻ってもいいよな？」

「まだだよ」

そう言っつて屋上に現れたのは……

雲雀恭弥。

第2雨

オレ、初日から遅刻――!? (後書き)

なんとか少しキャラクター出せましたねー。良かった良かったー(笑)

第3雨

オレ、雲雀と戦う！？

あいつは確か…雲雀恭弥。風紀委員長にして並盛最強の男…か。

ぶっちゃけ自分が風紀乱してるっていうね。そんな男がオレに何の用だ？

「まだだよって、何が？今の見てたよな？獄寺はオレに負けたの。これで終わり。さよーなら。」

そう言い蒼がまた屋上のドアに向かう。

ヒュンッ

「！」

雲雀がトンファーで襲いかかってくる。蒼がとっさに避ける。いきなり理由もなしに襲いかかってくるなよ！

「オレがお前と戦う理由はないけど？」

「君、今日遅刻したね。風紀を乱したやつは……かみ殺す」

…は？噛み殺す？不可能じゃね？何こいつ実は前世ライオン？雲雀とかいう名前だから前世は鳥と思った。でもなんか門の前通った時に話しかけられた気もするんだよね！。

「よくわかんないけど…ケンカなら受けて立つ…！ケンカは好きだしな！」

「どうでもいいよ。」

そう言っていると雲雀が攻撃を仕掛ける。

蒼はその攻撃を容易く避ける。

「はーずれっ」

「まだだよ。」

雲雀はトンファーから鎖を出し、振り回す。

蒼はその攻撃もヒラヒラと避ける。獄寺は呆然と戦ってる二人を見ている。

「またはずれ。なあ雲雀サン、あんたオレを倒す気ある？」
蒼が雲雀を挑発する。

「そういう君こそ武器を出しなよ…！」
雲雀は少しずつ息切れし始める。蒼はまだ余裕の表情。

「それじゃあ…お言葉に甘えて

とどめを刺させていただきます♪」
蒼がクナイを取り出す。

「雨風」

蒼がクナイを投げる。それを雲雀が弾く。
雲雀が安堵のため息をつく。

「甘いよ雲雀サン。甘すぎる」

蒼は雲雀の背後に高速移動し、クナイを投げる。

「雨菊うきく！」

蒼が投げた大量のクナイが菊の花びらのように雲雀の背中に突き刺さる。

「！」

ドサッ

雲雀が膝をつき、倒れる。

「オレに勝ちたいならもつと強くなつてよね」
そっぴい蒼が屋上から立ち去る。

しばらくして雲雀が立ち上がり、クナイを抜き、屋上から出て行く。

残された獄寺はやっぱり呆然とするしかなかった。
「雲雀に勝つなんて…」

あいつ何者なんだ？」

雲雀は応接室に向かう。
「霧沢蒼……気に入ったよ」

蒼は家に向かっていた。疲れたしいーよね？
ていうか、… やっちゃった…… ボンゴレの守護者になるやつとケン
カしても意味ねーじゃんよお！！

心の中で叫びながら家に向かう蒼だった。

一方帝は五時間目にボロボロになって教室に帰ってきた獄寺を見て、
だいたい察した。

蒼のやつ………

また暴れたのかよ！！！！！

帝君の苦勞は続く????

クシュンッ

「んー、だれか噂してんな。…ティツシュティツシュ…」
ソファに座りながらそうつぶやく蒼だった。

第3雨

オレ、雲雀と戦う！？（後書き）

戦い書くの苦手ー！ホントすんません！

イヤ、読むのは好きなんですよ？でも書くとなるとね？

そーだ。雲雀さんファンの人、ごめんなさい>（―――）<

第4雨

オレ、人の命救ったかも…

おはようございます。霧沢蒼です。

なんと、今日は！

「遅刻しなかったんですー！」

両手を挙げて蒼が叫ぶ。あ、声に出ちゃった。そういえば今授業中だっけ。先生の笑ってる口の端がヒクヒクしてる。あちゃー。

「霧沢。授業中だ。叫ばない！あと言わせてもらって遅刻しないのはあたりまえだ！」

「すいません。授業中ということのを忘れていました。あと言わせてもらって遅刻しないことはオレにとって当たり前じゃないんです！」

そう宣言し蒼が座る。

そんなことを宣言してくれるなー！

…そんな帝君の叫びは誰にも聞こえることはなかった…

そつえば今日は山本とかいう奴が自殺しようとする日だっけ。

言わせてもらおう…自殺しようとするやつは一回死んでからそういうことを考える！…あれ？死んだらダメじゃん。んー、オレも自分で何言ってるかわかんなくなってきた。

まあそれはおいといて。見学にいききたいな！。

あれって時間いつ？漫画読んでもわかんなかった。沢田より早く屋上に行かなきゃだし。多分午後だよな？

よし、午後の授業サボろう。

…あいつ……絶対なんか変なこと思いついた!!!

表情で大体何を考えてるかわかってきた帝だった。

???in屋上??

んー、まだ来ないのか？読書も飽きてきたんだけど。寝ちゃうぞー。

ガチャ。

山本が腕をつるして入ってくる。確か野球で行き詰まって沢田に相談した。そしたら「努力しかないんじゃない？」的なこと言われ、自主練して骨折したんだっけ？

オレは沢田に努力とか言われたくねー……

てゆーか沢田に相談しねー。

そんなことを思ってるうちに山本が屋上の柵を越える。あーあ。死んだ身にもなってみろよ。生きてるだけうらやましいもんだぜ？

山本に近づいていく。山本はまだ蒼に気づいてないらしい。

「山本武。あんた死にたいの？」

微笑みながら蒼が問いかける。山本が一瞬驚き、振り返る。

「確か…転校生の霧沢か。」

「否定しないってことは肯定ってことだよな。お前さ、腕一本折ったくらいで死ぬの？馬鹿げてると思わない？」

山本の顔が険しくなる。お、地雷踏んだか？

「霧沢に何がわかるんだよ。オレは野球命だった。腕を失ったら何も残らねーんだよ。」

ナニソレ。笑わせんな。

「あはははは！甘ったれんじゃねーよ。」

雰囲気の変わった蒼に少し驚いた顔の山本。

「腕を失ったら何も残らねえって？誰でもケガはするんだよ！そしてケガはいつか癒える。ケガ一つで死なれちゃみんな死んじまって神サマも困ることだろうよ。とにかく！ケガをしても野球のためにすべきことはあるんじゃないか？」

顔を叩かれたような顔になる。それでもやはりまだ迷いがあるようでうつむいている。大勢の人たちが階段を上ってくる音がする。オレが言えるのはここまでか。

「オレが言いたいのはそれだけだ。よく考えるこつた」

そう言い蒼はまた屋上のドアの上に寝そべった。↑雲雀サンがよく寝てるとこ。

するとドアが開きたくさんの人がなだれ込んでくる。沢田や浅野望もいるようだ。浅野がどう動くか見物だな。沢田と浅野が山本の前

に出る。

「武君！こんなことしない方がいいよ！」
えー。一言めがそれ？ナンセンス。

「二人とも止めにきたならムダだぜ。ツナ、お前ならわかるだろ？
何もかもうまくいかないなら死んだ方がマシだってよ」

山本が二人に言う。

「え、い、いや、山本とオレは違うから…」

沢田が言う。

沢田…それは誤解される。

「さすがだな。オレとは違って優等生ってわけだ」

あーあ。やっぱり。

「えー！ち、ちっ、違うんだ！ダメな奴だからだよ！」

「！？」

山本が驚いた顔をする。

「オレ、山本みたいにちゃんと努力したことないんだ。むしろ死ぬ
ときになって後悔するような奴なんだ…どーせ死ぬんだったら死ぬ
気でやっとならばよかったって…。だからお前の気持ちにはわからない
！ごめん！」

そう言いさわだがドアに向かって走り出す。それを山本が慌てて襟
を掴んで止める。

結果。沢田がバランスを崩し、山本に激突。

二人で落下

「今こそ死ぬ気になる時だぞ」
ズガンッ

リボーンが死ぬ気弾を撃つ。

「空中リ・ボーン！！！死ぬ気で山本を助ける！」

ポヨヨーン

沢田のつむじのスプリングのおかげで二人は助かった。

「お前の言う通りだ。死ぬ気でやってみなくっちゃな」
「！」

沢田が驚いたような嬉しいような顔をする。

「あと霧沢にもお礼だな！ツナたちがくる前に来てアドバイスくれたんだ！」

「霧沢さんが！？」

あいつアホか。あれは言いたいこと言っただけだっつーの。そーいや浅野は結局なにもしなかったな。ま、いつか。帰ろ。帝は何処だ！。

「帝！。オレ人の命救ったかも！。」

「は！？」

第4雨

オレ、人の命救ったかも…（後書き）

うーん。リボーンの出番が少ない？次はオリジナル寄りになりそうです！うし！がんばります！　てゆーか原作ばかり…；；

第5雨

オレ、初の女友達ができた！

おはようございます。寝起きの霧沢蒼です。現在9時。

え？遅刻なんじゃないかって？

今日は土日なのだー！

てなわけで。帝クンに買い物につきあってもらいまーす。起こしに
いこつと。

コンコン。

「みーかーどくん、あっそびーましよー!」

「…………え?」

?? 商店街??

「オレ…いつもだったらまだ寝てる時間なのにー!」
帝の悲痛な叫びが響く。

「そんなこと言ってねーでホラ、荷物を持つ！」
帝は荷物を持たされていた。女性の買い物は大変だ。

クッソーー、眠ー。重いー。蒼の奴起こしたのはこのためかよ！

「次はあそこー！」

あの無邪気さがかわいいけど恨めしい…。

あ！ていうか…

「ち、ちよ、ちよつと待て！蒼！もう金がねーぞ！？」

蒼が振り返り、ニコツと笑ってツカツカ戻ってくる。その笑い怖いんですけどー（泣）

「え？」

オレ真っ青。蒼は笑ったまま肩を組んでくる。

「帝クーン。確か前神サマだっけって言ったよねえ？今こそその力を使う時だと思わない？」

「…金を…作り出せと……」

「うん？」

あー、変な汗だらだら出てきた。てゆうかハート黒いんですけど。

「それって犯罪じゃ…」

「うるせー黙れ？」

「すいませんでした。」

良い子はマネしちゃダメだよ

「あー買った買ったー」

「重い…」

二人は帰り道を歩いていた。ふと蒼が後ろを振り返り、首を傾げる。

「蒼、どうかしたのか？」

「…。いや、なんでもない。いや、なんでもなくない！ちょっと公園寄って帰るから先帰ってて！」

「じゃあオレも…」

「大丈夫！」

蒼が走っていく。ポツンと残された帝は？？

「いや、オレが寂しいんだって。…帰ろ。」

?? 歩き出す。

寂しがりな帝クンだった。

一方公園に着いた蒼。

ギシッ

ブランコに座り、言う。

「そろそろ出てきたらどうかな。オレしかないよ？」
ガサガサッ

木の陰から人が出てくる。やっぱりつけられてたか。
あれは風…いや、もうクローム髑髏か。

「あ…ごめんなさい…」

「謝らなくていいんだけどさ。帝と買い物してたときからいたよな？オレに何か用？」

クロームが戸惑うように一歩下がる。

「あの…そのチョーカー。かつこいいなって…何処で売ってるの
なって…。」

「え…それだけ？」

あ、今のオレたぶんスゴいマヌケな顔してる。

「うん。」

「なんだ。早く言えよ。買いにいこーぜ。」

蒼が立ち上がりながら言う。クロームが驚いた顔をする。

「いいの？」

「もちろん。ついでにその制服の代わりも買ってやるよ。コーディネートしてやる。」

「え…。さすがにそんなにしてもらえない。」

「いーっていーって。記念！…友達記念？」

クロームの顔が明るくなっていく。

「友達？」

「おう！友達だ！」

「…うん！」

このときがオレにとってもクロームにとっても初めての女友達だった…

第5雨

オレ、初の女友達ができた！（後書き）

いつも短くてすいません！時間がなくて…でも投稿したくてですね…。結果短いものになっちゃってね…。うーん。次はいろいろキララ出てきますよ！

第6雨 クロームと店へ

そつしてまた商店街に来た蒼とクローム

「んー確かこの辺の店だったと思うんだけどなー…おっ、あつた」

そう言いクロームを引き連れ店の中に入る。
チリンチリーン…

「いらっしやいませー。あ！蒼ちゃんまた来てくれたのー！？」

レジに立っていた店員が蒼たちを見るなり嬉しそうに声をあげる。
この人はマキさん。この店の店長をしている。この店によく来店する蒼と趣味が合い、仲良くなった。

「ああ！ねえマキさん、オレのこのチョコーカーって在庫ない？」
蒼が左手首のチョコーカーを見せて言う。

「あー！そのチョコーカー！蒼ちゃんが初めてこの店に来てくれた時のね！あるわよ。何、彼氏とペアアルック？」

「ちげーよ！いねーし！この子、クロームってんだけどさこれと同じのが欲しいんだって」

マキの目が蒼の後ろに半分かくれていたクロームの方に向く。ビクツと震え、蒼の後ろにさらに隠れる。クロームはあまり人に慣れていないらしい。でも多分マキさんになら心を開けるんじゃないかなー。オレも信頼してるし。

「まあ、かわいい子じゃない。よろしくね。」

そう言いマキがてを差し出す。クロームもおずおずと手を差し出す。握手をし、マキがニコツと笑い、店の奥に向かう。

「ちょーどラストだったのよー。はいっ。これで良かったかしら？」
クロームにチョーカーを渡す。クロームの顔がみるみる明るくなっ
ていき、コクコク頷く。

「そーだ、マキさん。クロームに似合う服選んであげてくれない？」

「え？」

マキが不思議そうな顔をする。

「クロームさ、この制服以外ないんだって。オレがコーディネートしてあげようと思ったんだけど…オレセンス悪いからさ。」

「そんなことない！…蒼はセンスいいよ！」

クロームが食いつく。なんでそこでいくんだろ？

「ありがと？」

「！うつん…」

嬉しそうにうつむく。マキが口を開く。

「あたしもクロームちゃんに同感だけど…まあそういうことなら任せて！料理しがいがあるわねー。五分ほど待ってて！全身コーデでいいわよね？」

「ああ。よろしく。」

マキがまた奥に入っていく。

「どうよ！」

マキが自信満々に言った。

白い生地に着がけが描かれているタンクトップに黒の半袖ジーパン。結構フリルのあるベルト付きのミニスカに七部丈レギンス。それと赤いパンプスだ。

「いい！クローム似合ってるよ！」

「ありがとう…」

嬉しそうにお礼を言うクローム。

「じゃあ会計ね！」

マキが言う。

「え？」

「…え？」

「いや、そこは常連客のよしみでさあ…」

「こっちも営業なんだよね…！わかったよ！半額！1530円
でどう！？」

「オツケー、さすがマキさん！」

無理矢理値下げし、店を出る。すると…

「え！？霧沢さん！！」

「これはこれは…沢田軍団。」

第7雨

オレ、ケンカします♪

なんなんだろ。オレ今日運がいいんだか悪いんだかわかんねー。

何で今……

沢田たちと会わなきゃいけないんだよ！

なんでこんなところに霧沢さんがいるんだ！？

今日は京子ちゃんと出かけられると思ったたらリボーンと獄寺君と山本、ランボにイーピンたちまでついてくることになって気分が下がってるんだよなー。というか霧沢さん怖いよ！

リボーンは気になるみたいでずっと調べてまわってる。雲雀さんに勝ったって本当かな？

わわわわ、何かこつち睨んでるー！

「何でアンタたちがここにいるんだよ。」
蒼の発言に獄寺が食いつく。

「十代目になんて口利きやがる！」
そう言いダイナマイトを構える。

「まだ懲りてないの？負け犬君？それにオレは沢田に聞いているの。」
あわてて答える。

「い、いや、ちょっとみんなで買い物に来たんだ。」

「それにしても引き連れ過ぎだろ。あ。この子かわいい」
イーピンの前でしゃがみ、話しかける。

「君、チャーハン作れる？」
えー！？いきなりの質問がそれ！？

イーピンが頷く。

「そっか。今度食わせてくんない？中華料理好きなんだ」

イーピンが嬉しそうにまた頷く。

霧沢さんって……ほんと優しいのかもな……

「お。そーだ。クローム帰ろうぜ……っていない!？」

ほんとだ! 霧沢さんの後ろにいた子がいなくなってるー!? 何処行つたんだ?

「いや! やめて!」

霧沢さんの後ろの方から声がする。さっき霧沢さんの後ろにいた子が三人のヤンキーに囲まれてる。関わりたくないー!

カチャッ

「ツナ、行つてこい」

リボーンが銃口を向けてくる。

「ちょ、ちょっと待って！タンマ！」
でもその銃口が引かれることはなかった。

「余計なことをするな。アルコバレーノ。」
リボーンの首にクナイが当てられる。リボーンが反応できなかった
！？そんなことって…

蒼はリボーンの首からクナイを離すとクナイをしまい、クロームの方へ走っていき、ヤンキーの手を掴む。

「オレの連れだ。離せよ」
「ヒュー！こっちの姉ちゃんもきれいじゃん！遊びのお誘いしてた
だけだぜ？」

ヤンキーがへらへらと答える。蒼が眉をしかめたことも知らないで。

「もう一回忠告する。5秒以内に手を離せ」

「だからお誘いしてるだけだっていつてるじゃん！遊ばー…」

「宣告終了」

ゴスッ

蒼がヤンキーの腹に思いつきり蹴りを入れる。

「がっ…」

ヤンキーが吹っ飛ぶ。

「テメー何すんだよ！」

「調子のつてんじゃねーぞ！」

他の二人もかかってくる。

「哀れだな。かかってこなければ何もしなかったのに…」

その後10秒でケリがついた。蒼の圧勝だ。

「クロ？ム、大丈夫？」

「うん！ありがとう」

「帰ろうか。送るよ」

何もなかったかのように二人が歩いていく。

チリンチリーン

さつき二人が出てきた店から女性店員がでてきた。

「あー！また蒼ちゃんケンカしたのー！？まったくもー、処分する方も大変なんだからー。」

そう言いヤンキーたちたちを引きずって連れて行く。

何処に連れてくの！？ていうか処分するってヤンキーたちどうなっちゃうのー！？

その場にいた人たちの思いが一つになった瞬間だった…

スゴい…霧沢さんってこんなに強かったの？さっきもリボーンに気
づかれてなかったし…

なにもの————！？

霧沢蒼… やっぱりただ者じゃねーな。さっきのケンカの強さ半端じゃねーぞ。しかも奴は武器を使わないであの強さだ。その前の…。まったく避けられなかった…。気配すら感じなかったぞ。さらに気になるのは奴の情報についてだ。ボンゴレの情報網を使っても何も出てこねえ。あいつのいとこの神野帝もだ。どうなってんだ？絶対暴いてやるぞ。

「ファミリーにも入れるしな」

「今度は誰ー！？」

「ヒミツだ」

ツナの悲痛な叫びが響く中リボンがニコツと笑った。

「ハックションー！ズズツ。なんなんだよ最近風邪気味か！？」
「蒼…大丈夫？」

「ああ…平気。」

第7雨

オレ、ケンカします♪（後書き）

こんにちはー！更新遅くてごめんなさい！

神野帝って…そのまんまジャン…

自分で神だって言っちゃってますよね…

第8雨

オレら、二人そろって遅刻中！

あーよく寝たー！おはようございますー！

霧沢蒼でございますー！昨日はいろいろあったとはいえクロームをちゃんと家に届け、めでたしめでたしでしたねー！というかめでたしでっただんですよー！なんでこんな口調かって！？そりゃあなた……

走ってるからっすよー！

帝クンと仲良く遅刻中！

さかのぼること二十分前……

「…お。ああ！蒼！起きろってのこの！」

バサッ

布団をはがされる。

「んだよ。今日は日曜日だろ…」

蒼が寝返りをうちながら言う。

「昨・日・が・日曜だ！今日は月曜だ！ちなみに8時10分！」

蒼、一時停止。

チツチツチツチツ…チーン！

「はー！ー！？もう授業始まんじゃねーかもっと早く起こせバカ！」
「オレは7時半からドアの向こうから叫んでたけどな！寝てる女の部屋に入ったオレの勇気をたたえて欲しいくらいだ！このねぼすけ！」

「ねぼすけはやだ！何か響きがマヌケ！」
「知るかー！」

そんなやり取りをしながら制服を最低限着、髪を結び、食パンくわえて家を出る。

「おい帝！神サマなんだろ時間止めらんねーの！？」

「やろうと思えばできるけど禁止なんだよ！」

「やれんならやれよ！」

「…オレの言ったこと聞いてたか！？」

門が見えてくる。ん？なんか門高くなってねえ！？雲雀が立っている。

「飛び越えられないように高くしたのさ。風紀を乱すものは……噛み殺す」

そーいうことー。納得。でも…

「「なめんなよ！」」

思いっきり地面を蹴り、門に乗る。

「お、帝、また窓開いてる」

「開けといたんだよ、バーカ」

「おー！感謝！んじゃヒバリさんバイバイ♪」

帝が門を蹴り、窓に乗る。続いて蒼も門を蹴る。

「ふー。良かった。無事着地」

帝が窓枠にのり、安堵のため息をつく。

「どけ帝ー！ー！」

ドゴッ

「ぼへぶっ」

蒼が帝の背中を蹴り飛ばし、帝は教室の方へ落ちる。

スタッ

「ふー。無事着地」

その言葉に帝が文句を言う。

「待て！オレが無事じゃない！」

「知るか」

「知るかっ！知るかはねーだろ。てゆーか蹴ることねーだろ」

「どけって言ったじゃん」

「あれで退くことができたならスゴいよそいつ！」

ギヤーギヤー言い合ってる二人をボーゼンと見ているクラスの人＋先生。

先生が我にかえり、

「二人とも、その服装は何？整えなさい！」

確かに蒼たちはシャツのボタンはズレ、ネクタイはユルユル。髪はぼさぼさ。ひどい有様。

でもさ…

今つつこむとこそこじゃないでしょー！！

クラス全員の思うことが一致した。

今日は確か笹川了平が沢田と戦う日だな。

熱血ヤローは嫌いなんだよな！。ウザイうるさいめんどくさい。嫌いな三要素が全部入ってる。でも見に行かなきゃな！。

浅野は動くかな？まさか傍観してるだけなんてないよな？まあすることなんてないけど。

救急セット持ってきたら爆笑だな。

そんなことを思いながら椅子に座った蒼だった。

第8雨

オレら、二人そろって遅刻中！（後書き）

あーーーーー！また短い！！ううう。

これからテストシーズンなので更新遅れるかもです。

蒼：別に今から始まったことじゃねーだろ

ギクッ

蒼：それに短いしな。

そ、それじゃ、失礼しまーす…。これからも気長に見てくれたらうれしいな？

第9雨

オレ、言い争いをする？

放課後…

さーて…ボクシング部に行くか。

「ゆくぞ！沢田ツナ！手加減などせんからな！！」

おーやってるやってる。ギャラリー多いな…げ、浅野もいる。

ぶっ！↑吹き出す

ホントに救急セット持ってきてる…どんだけー…

カーン！

スタートの鐘が鳴る。

ゴッ

ドダーン！

いきなりツナが殴られ、倒れる。

「油断するな沢田！」

「（違うよ実力だよー）」

沢田……本当に哀れだな……

チャッ

リボーンが銃を構える。

「（ひえー！今死ぬ気弾撃たれたら、京子ちゃんのお兄さんをボコボコにして京子ちゃんに嫌われちゃうよー！）」

撃っちゃダメー！という風にジェスチャーでリボーンに伝える沢田。

それで伝わったらすごいよ……お前もリボーンも。

「なら、こうだ。」

ズガンッ

リボーンが了平を撃つ。

えー…今のジェスチャー伝わったの？…

だが、撃たれても了平にはなんの変化もなかった。

「（まさか…普段から死ぬ気の人には死ぬ気弾撃っても変わらないの！？」

「笹川了平。たいした奴だな」

はい、リボーンのお気に入り決定。

その後、沢田にも死ぬ気弾が撃たれ、結局笹川兄をボコ殴って終わり。

でも…

「ますます気に入ったぞ沢田！お前のボクシングセンスはプラチナムだ！！必ず迎えに行くからな！」

「もーお兄ちゃん嬉しそうな顔してー！」

「（むしろ気に入られたー！？？）」

沢田の心配はすべてムダだった…

「お前ファミリーに入らねーか」

「逆スカウトすんなよ！」

リボーンが了平をスカウトしだし、急いで止める沢田。

あーあ。ホントなんなの。ホントに見てるだけじゃん。浅野。笑って眺めてんじゃねーよ。ピンピンしてるけどケガ人が目の前にいるだろうがー！

イライラしてじっとしていらなくなった蒼は窓を開け、中に入る。

「え！？霧沢さん！？」

沢田が驚いた声を出す。獄寺達も驚いてるようだ。蒼は浅野の方に歩いていき、救急セットをひったくる。

「貸せ！」

「あっ」

そして了平の方へ歩いていき、テキパキと消毒など、簡単な対処をする。

「ん。終わり。んじゃ、やろうぜ」
そう言って蒼がグローブをはめる。

「「「「え？」「」「」

その場の全員がきょとした声を出す。

「おう、もしかや入部希望だな！？」
了平が蒼の方を向いて言う。

「ちげーよ」

蒼があきれながら答える。

「オレともボクシング。やろうぜ。」
蒼がニヤツと笑って言う。

「ほう。いいぞ」

了平もニヤツと笑って答える。

「（えー！ー！ー！なんでこの人さっきお兄さんの応急処置したのー！！？）」

心の中で密かにツッコミを入れるツナだった。

「えっ、でも霧沢さんは女の子だし、やめた方がいいんじゃないかな？」

？浅野望だ。オレはなんでかこの女がものすんごい嫌いだ。

「ハッ。女の子だし？女は弱いと決めつけないでほしいね。女だって強くなれる。努力もしねーやつに止められたくねーよ」

浅野が衝撃を受けた顔になる。でもキツと蒼を睨み、

「！…心配してあげただけなのに…」

「あげた？既になから目線なんだな。心配してくれたみたいでどうもありがとーございました。あーあ。時間のムダ。始めよーぜ。」
蒼が了平の方を向く。

「おう！」

了平がグローブをパアンとならす。

「ツナ。」

リボーンがチヨイチヨイとツナを呼び寄せる。

「何？」

「よく見とくんだぞ。ファミリーに入るんだからな」

「えー！…！？昨日言ってたのって霧沢さんのことだったのー！？」

うるさそうに蒼がツナの方を見る

「オレが何だ？沢田」

「い、いや、なんでもないよ！」

蒼がまた了平の方を向く。

「んじゃ、今度こそ…」

楽しい時間の始まりだ♪」

第9雨

オレ、言い争いをする？（後書き）

うん！今度はそこその長さかな？

…ていうか浅野…作者に嫌われたか？かわいそうになってきた…

次回は了平と蒼が対決しちゃいます！果たして勝つのはどっちでしょうか！？

蒼：オレに決まってるんだろ。

また来たの！？

蒼：来ちゃわりーかよ。

いえいえ滅相もございません…

蒼：ていうかさ、オレ時々めっちゃ出番少ないじゃん？だから代わりはこの後書きに出てきてるってわけ。

い、いや、私はここでしか喋れないんですけどぉー！！！！

乗っ取らないでくんましー！！

それじゃまた次の話で！！

第10兩

オレ、笹川兄と戦う！
♪

やっと始まる。

カーン！

開始の鐘が鳴る。

ビュッ

いきなり了平が仕掛けてくる。

「！ヒュー、やるね。さすがボクシング部。」
そう言い蒼が簡単に避ける。

その後も了平が左アッパー、右フック、ボディブローと連続で打ってくる。

だがその全部を蒼は避けきってしまった。

「うし。オレもそろそろいくかな」

ドゴッ

蒼がボディブローをいれる。すごい勢いで了平が吹っ飛ぶ。

パリーン

あーあー窓ガラス割れたよ。ボクシング部の窓だいじょぶか？

「えー！？お兄さんが負けた！？」

沢田が驚いた声を出す。

アンタも倒しただろうがよ。

ため息をつきながら了平の方へ向かい、手を差し出す。

「ん。」

だが了平がいきなり起き上がる。思わず蒼が退く。

そして蒼の肩をガシッと掴む。

「霧沢蒼といったな。是非ボクシング部に入らんか!？」

「は!？」

「お前のボクシングセンスはビッグバンだ!」

いや最早何言ってるのかわかんねえよ!!

「丁重にお断りさせて頂く」

「極限になぜだ!」

あんたみたいなのがいるからだよ…

「まあ楽しかったよ。じゃあな」

そう言い部屋を出る。

「なんか…嵐が去ったというか…」
沢田がぼーっとして言う。

「霧沢蒼。やっぱりファミリーにいれねーとな」
「まだ言ってるー!!」

リボンと沢田のコントのようなやり取りは続く…

並盛商店街を歩く蒼。

「んー楽しかった！。でも何か腹減ったな…」

商店街を歩いていくと寿司屋が見えてきた。

「寿司屋か。今日は久々に奮発するかな。」
そうつぶやき、のれんをくぐる。

「いらっしやい！お一人様で？」
はちまきを巻いた髪のツンツンしてるおじさんが元気よく話しかけてくる。

「ああ。まずは茶碗蒸しとマグロお願いできる？」

「へい！少々お待ちを！」

ふーん。チェーン店とかじゃないみたいだけど…味はどうだろ。

二、三分後…

「へいお待ち！」

そう言い、出してくれる。

「ども」

まずは茶碗蒸しを口に運ぶ。

「！うまい。」

「お。気に入ってもらえたかい。うちの寿司は絶品だからな！」
おじさんが嬉しそうに言う。

「でも…マグロは…少し温まってる…」

「そうかい。そりゃすまなかつたね、つくり直しましょうかい？」

「いや、いい。それより

さばかせてくれ」

「え？」

おじさんが驚いた顔をする。そりゃまあ魚をさばかせるとかいっ中
学生はいないわな。

「オレこれでも実は25歳なんだ（大嘘）。一回さばいたことあるんだ（本当）」

「そうなのかい！でもその制服…俺の息子と同じなんだが…」
あ。制服なの忘れてた。んー。どうしよ。

「あー。んー。あ！これはバツゲームみてーな！そんな感じだ！多分！」

「？まあいいよ。」

目の前にでっかいマグロが横たわっていて、包丁を渡される。

フー

目を閉じて息を吐き出す。

カッと目を見開く。

ズバズバッ

ストトトツ

一瞬でマグロをさばき、用意されていた皿にのせた。

「あちゃー。少し太さが違うか。失敗した」

「……すげーな。嬢ちゃんにもんだ？お前剣でも習ってたのか？」
おじさんは開いた口が塞がらないというかんじだ。

「いんや。」

「すげーな。話聞かせてくんねえか。酒でもおごるぞ」

あ…オレ25歳で通ってるんだっけ。

その後おじさんと一緒に酒を飲み、蒼はめっちゃ酒に強いことがわかりましたとさ。

ガラッ

「ただいまー親父！って霧宮！？何してるんだ！？」

山本！？ああ…山本ん家って寿司屋だったっけ。

そら驚くわな。クラスメイトが自分ちで足組んで自分の親父と酒飲
んでんだから。

「おい親父！何飲ませてんだよ！未成年だぞ！？」

「ん！？その嬢ちゃん25つて…」

「オレのクラスメイトだ！」

おじさんは青ざめたり驚きで赤くなったり大忙し。

でも…こんな親父さんがいるんだったら

山本のことは信用してもいいのかもな…

そう思いながら蒼は意識を手放した。

「霧沢！おい！…寝ちまったじゃねーか！親父が飲ますから！」

「だ、だってよう…いい包丁さばきだったからちつと語り合いたくなっちまって…」

「まあしょうがないな。寝かしてくる。」

そう言い蒼を抱え居間に向かう山本だった。

第10兩

オレ、笹川兄と戦う！ ♪（後書き）

蒼：おい！霧宮（作者）！何未成年に酒飲ませるんだ！

いいじゃん。蒼が酒に強いことわかったし。いい子はマネしちゃだめですよ

ドゴッ

イタッ痛いよ蒼さん！

蒼：うざかった。

…それだけ。それだけで？まあいいや。次回、恋愛ものは期待しないでください！

さらばです！

第11雨

オレ、初の男友達！

…ん。何処だここ。めっちゃフツの部屋。うっ。何これめっちゃ気分悪いんだけど。

あー。そういえば山本の親父と酒飲んだんだっけ。てことは山本の家か。

ガチャ

「おお、霧沢！起きたんだな水と薬持ってきたぜ」
そう言い蒼の寝ている布団の近くのテーブルにおく。

「…サンキュ」
起き上がり、水と薬を飲む。…苦っ。

「なあ、お前なんで25歳なんて嘘ついたんだ？」
親父さんから全部聞いたらしい。苦笑しながら聞いてくる。

「？。…中学生がマグロさばけるとか言ったら引かれると思ったんだよ」
そつばを向いてバツが悪そうに答える。

つかの間の沈黙。

「ぷっ、あはははは！お前面白いのなっ」

山本が腹を抱えて笑い出す。

「なっ、そんな笑うことないだろ！」

それでも山本の笑いは止まらない。

「わ、悪い、でもよ、霧沢って楽しい奴なのな！もっとムスツとしてる奴かと思っただぜ」

どっかの風紀委員長と一緒にするなよ。

「親父も気にいっててさ、また来いつて。今度は酒なしで」
「いやまあ普通酒なしだけどな。変な会話をしていることが笑えてくる。」

「なあ、霧沢のメアド教えてくんねーか？親父の伝言とかもあるしな」

「かまわねーよ」

ケータイを出し、プロフィールを送る。

「ハハハハッ！お前メアドまで面白いのな！」

「んなことねーよ！フツーだ！」

赤面し、そっぽ向く蒼。

「もう遅いし送るぜ」
「どーも。そーいや」お前「は何かやだな。蒼でいーよ。」
「そっか！オレも武でいいぜ！」
「ん。」

そう言い家を出る二人だった。

k o k o m o . n e . j p
「 i a m a o . i w a s | R E B O R N ! . @

蒼と山本が並んで歩いてる様子を見ている者がいた。

浅野望だ。

「なんで霧沢さんと武君が一緒にいるの……？私とはいろいろ理由をつけて話してくれさえもしないのに……。ううん。偶然会っただけだよね。明日は私とも話してくれるよね？」

「蒼のメアドって変なのな！」

「だからどこがだよ」

「だってよ、『私は蒼。私はレボルンでした』っておかしくないか？ 蒼の昔のあだ名か？」

「……あのな。REBORNはレボルンじゃなくてリボーンって読むんだ！ REの部分は、また、再びって感じの意味がある。BORNは生まれるとかそんな感じ。つまりREBORNは生き返るってこと。わかったか！？」

「なんとなくわかったと思うぜ！ ハハハッ」

「英語はなんとなくじゃだめなんだ！」

「蒼だって『そんな感じ』とか言ってたのな」

「っ！ そ、それはそれだ！」

蒼の英語講座は蒼のマンションまで続いた。

「ただいまー」

家に着いたのは11時半だった。帝はもう寝ている。机の上には一人分の夕食があった。

「…量多すぎだったの。」

少しあったかい気持ちでベッドに入った蒼だった。

第11兩

オレ、初の男友達！（後書き）

短いのは気にしない！キャラ崩壊も気にしない！

蒼：気にしろ。

厳しいッ

リボーン：当たり前だぞ。

アンタまで出てくるの！？

リボーン：もっと出しやがれ！！

スンマセン……さよなら……次の話で会いましょう！

第12雨

あー…よく寝た…

キンコンカーンコン♪

ふあゝ…んーよく寝た！もう昼休みか…

朝のホームルームから記憶がないのはなんで…？

「蒼が寝てたからだよ！」

「っ！？」

ガタッ

いきなり声が聞こえたので音を立てて椅子ごとさがる。

「なんだ…帝か…脅かすなよ」

帝は蒼の机に手をついてしゃがんで、顔だけ出ている状態だ。

「別にオレだって驚かそうとしたわけじゃないって。お前な、ずっと寝てると写真撮られ放題だぞ？」

「は？オレの写真撮って何も得することなんかねーだろ。」
帝は呆れ顔で、

「あのな、お前は結構人気あるの。おわかり？知らない人が自分の写真持つてるって気持ち悪くないのか？」

「ますます意味わかんねー。まずオレ人気ねーし。なんか女子とかと目が合うと赤くなって目そらされるし。何怒ってるんだか。」

「どーでもいーよ。オレ飯食ってくる。」

最近は天気がいい日が続くので屋上で食べている。あそこの風が丁度いいから好きだ。

「おいちよつと待つ」

「帝ー飯食おうぜー」

クラスメイトが呼んでる。

あーもー…後で言えばいいか。

「おう。今いく」

帝も行ったし屋上屋上♪

席を立ちドアの方へ向かう。

「武くんっ！」

ん？前は全然気にしなかったけど武は少し仲良くなったしな。声をかけたのは…

浅野か。

「一緒にご飯食べよう？」

うわ。オレだったらぜったいやだ。でも武だったら断らないだろうな。

「わ、悪い、今日はちょっと…」
あれ？

バツが悪そうに武がふいに後ろを振り向く。そこには丁度屋上へ行くこうとドアに手をかける蒼がいた。

「っ！オレ今日は蒼と飯食う約束してたんだ！わりいな、また今度！」

「は？オレは別に…」

「ホラ屋上行こうぜ！」

そう言い武が蒼の背中を押し、教室を出て行く。

「『また今度』って…いつ？」

一人残された望が言った一言は誰にも聞こえる事はなかった。

「あ、あのさ、望ちゃん。よかったら一緒に食べない？」

ツナが望に声をかける。

「いいの？」

「もちろん！いいよね、獄寺君？ってあれ…？」

ツナが振り返ったそこには獄寺はいなかった。

「…おい。どういうことだ？お前浅野の事嫌いじゃねーんだろ？」
屋上へ向かう階段を上りながら武に聞く。

「ああ。嫌いじゃないぜ？でもよ、浅野の隣の席の奴いるだろ？あいつが浅野の事好きらしくて協力してくれて頼まれちまつて…」
あー。そういうこと。納得。武らしいかも。…でも浅野もかわいそうなこと。それにしても…

「いつまで隠れてるんだ？

獄寺くん？」

「チツ、気づいてやがったのかよ。」
「そりゃ、あんだだけ殺気プンプンさせてたら…ねえ？」

「ご、獄寺！こんなとこで何やってるんだ？」
「野球馬鹿には関係ねえ！」

あらら。素直に聞けばいいのに。
「はー。なんで昨日までツンツンしてたオレが武と仲良くなったか…それが知りたいんだろ？」
「っ！」

「図星ー」
そんな事話してるうちに屋上につく。
「まあ一緒に食つか？教えてやるよ。理由。たいした事じゃないけど。」
「そう言いドアを開け、床に座る。」

「武とは、あれだ…」
獄寺がつばを飲む。

「なんだかんだで仲良くなった」
ガクッ

「はははっ、たしかにそんな感じなのな！」

武の親父さんと酒飲んで仲良くなったなんて言えねーだろ…。

「そういえば獄寺はツナと食べなくていいのか？」
山本が獄寺に聞く。
確かに。いつも沢田にくつついてるのにな。

「今日はいいんだよ！浅野がいるしな」
「お前浅野嫌いなのか？」
蒼が聞く。その問いに獄寺が頷く。

「あの女十代目のお傍をちょろちょろしやがって…」

あー…何、こいつも何か誤解してんの？

第12兩

あー…よく寝た…（後書き）

ちょっと長くなりそうなんです！

更新遅くなってごめんなさい！

第13兩

オレ、みたらし食いまくる！！

？？前回の昼休みの続き？？

獄寺！。誤解してますよー。浅野が沢田に近づいてるんじゃないよー。浅野が武の事好きなのに気づいた沢田が気遣ってやってんだと思うよー？でも…

「オレも浅野は苦手だな。あいつは助けてもらうばかりのタイプだ」
蒼がみたらし団子を食いながら言う。

「ハハハッ！でもでも優しいところもあるんだぜ！」

山本がさりげなく？フオーする。まあ優しいかもしんねーけど。
「それでもオレは守ってもらうばかりの奴は嫌いだ。優しい奴は大体臆病者だしな」

食べ終わった団子のくしを山本の方へ向け、言う。それまで黙ってた獄寺が口を開く。

「なあ、話変わんだけどよ、お前昼ご飯にみたらしなんて食つてのよ!？」

そう言い蒼の弁当箱の中の大量のみたらし団子に目を向ける。確かに言われてみると昼ご飯にみたらし団子だけとはとてもおかしく、しかも量が半端じゃない。

「た、確かにすごい量なのな…」

山本も驚いた顔でまじまじと見る。

「ん？そんなにおかしくねーだろ。一本食つか？」

蒼が獄寺にみたらし団子を一本差し出す。

「いや、オレはあんこはだからいらねーよ」

「（断る理由それかよ!）」

密かにつつこんだ山本だった…。

プチ。

「ん？おい野球馬鹿。お前なんか糸切ったか？」
「いや、切ってないぜ？獄寺が何か切ったんじゃねーのか？」

「おいてめえ……」

二人が振り返ると蒼がスゴい量の殺気を放っていた。

「団子は当然、見たらしろーがあー！ー！！！」

「……は？」

蒼が突然みたらしについてキレだしたのだ。

「は？じゃねーよ、てめーなあ、見たらしは団子の王様なんだよ」

K I N G O F 団子”なんだよ！”

その後もあんこはパンと共にあるべきだとか、見たらしは甘味の中

でもトップだとか訳の分からない事をいい連ねる蒼。これはエンドレスだと察した二人。

「お、おれもみたらし好きなのな！うまいよな！一本くれねーか？」
「ん」

蒼はまたみたらし団子をくわえ、もう片方の手で山本に団子を渡す。なんとか怒りは収まったようだ。

「（野球馬鹿、ナイス！）」
心底ホッとした獄寺だった。

「（それにしてもスゴい量だな……）」
「」

「そういえば獄寺は蒼の事名前で呼ばないのな」

「それは今少し話ただけだしよ……」

「オレは別にかまわねーぜ。『浅野がちょっと、いや正直かなりウザく感じる同盟』結んだしな！」

「いや組んでねーし！つか長ーんだよ！」
獄寺がつっこむ。

「『浅野うざい同盟』」

「…略し過ぎじゃね？直接的すぎね？」

「まあ細かい事は気にするな！オレはなんて呼べばいい？」
獄寺が一瞬ポケツとして我にかえる。

「何でもかまわねえ」

蒼のシンキングタイム しばらく腕を組んで考えてたが、何か思いついたみたいで顔を上げる。

「獄寺って59って感じで中途半端だから60にして六十寺とかどうだ!？」

チーーーーーン…

「蒼…人の名字を中途半端はひでーのな…」

「そ、そうか。じゃあやっぱノーマルで隼人でいーよな！」

「もう何でもいいぜ…」

キンコーンカーンコーン♪

「お、予鈴だな」

「帰るか」

そうして教室へ戻っていった。

???廊下にて????

「なあ蒼、テメーさっきの弁当にみたらし団子何本入ってたんだ？」
ふと思い出したように獄寺が蒼に問う。

「ああ。50本。」

「50本!?」

「あー…幸せだった…」

嬉しそうな顔をする蒼。

「てことは50×4…団子200個じゃねーか！」

「ありえないのな…」

「んなことねーよ。もつといけるぜ?」

そう言いニカッと笑う蒼。

「（食った分は腹の何処に消えたんだ??）」
二人に新たな疑問が浮かんだ…

第13兩

オレ、みたらし食いまくる！！（後書き）

さて、蒼のイリユージョン！団子は何処に消えたんでしょうかねー
ー！食ったもんが消えるなんて最高じゃないですか！！

世の中からメタボが消えますよ！

皆さんは団子はみたらし派ですか、あんど派ですか？私は…
みたらし派です！

蒼：誰も聞いてねえよ。

またあなたですか！いーもん！きつと誰かは答えてくれるもん！…
暇がお有りの方はコメントくれたら幸いです…

！そーだ！もうすぐ二作目を始めようと思います！私の部メンをモデルにしたものです！題名は…まだ考えてないです…

始めたらまた報告させていただきます！

蒼：誰も見ねーよ。

またですか！いーもん！でも…載せた時は見てくれたら嬉しいです

…

第14兩

オレ、シャマルと会う！

キンコーンカーンコーン♪

放課後か。

…また昼休みの後の記憶がない…

モシカシテ…

これがキオクソウシツ！？

「蒼の場合は寝てただけだ！」

頭の上から声がしたと思ったら何か本みたいなもので叩かれた。帝が机の前に立っていて、こっちを見下ろしてる。

「いった…ていうか何！？なんで思ってた事が分かんた！？やつばあれか！？神サマはエスパーなのか！？」

「は…あのな、全部声に出てたから。誰にでも分かるから。てか人前で神サマとか言うな。」
ため息まじりに言う。

「うーい。」

「…絶対分かってねえ。まあいいや。おまえな、よくあんなにぐっすり寝れるな。」

「お褒めのお言葉ありがとうございます。」
蒼が体を起こし、膝に手をおき座ったまま、きれいにおじぎをする。

「いや。ほめてないから。センサーが教科書で叩いても起きやしない。センセがかわいそうだったわ」

「んーごめんなさい」

「オレに言われても。」

家に帰る時はやっぱり帝と二人な訳で。

退屈なのよ。わかる？この平凡さ！

つまんねええええ！！！！

というわけで。

「帝。レッツ寄り道。」

「は？」

「レッツ寄り道。」

「うん。聞こえてるよ？どこに？」

「レッツ」聞こえてるって！！どこに！！？」

あ。

考えてなかった。

「その顔は考えてなかったんだな。」

思いつきり顔に出ていたらしく、帝も呆れ顔。

（もしかしたら帝は蒼という限り常に呆れ顔なのではないか

ばい作者)

「ん！ 非凡なところ行ってーな」
「非凡か…」

沢田の家は？」

おお！確かにいろんな事が起こってそう！

変な赤ん坊いたし！

漫画の主人公らしいし！

主人公だったらいろいろないとな！

うし。行くところ決定！

沢田宅！！

着いた着いた♪

蒼と帝は沢田の家の玄関の前にいた。

うんうん♪なんか騒がしいぞ♪

「邪魔しまーす」

「お、おい！普通チャイム鳴らしてからだろ！」

「開いてた方が悪いと思いまーす」

そんな事をいいながら入った先には…

半裸の沢田。

ボクシング本を抱えた笹川妹。

何か変な親父。

あ。赤ん坊もいた。ちっこくて見えなかった。

うん。

「「おじやました」」

そう言い帰ろうとする二人を沢田があわてて捕まえる。

「わわわわ！ま、待って！違うんだ！これは…」

「うん。わかってるよ、沢田」

「そんな哀れみの目で見ないで……！」

でもまあ面白そうだから見学する事にした。

「ていうか沢田って入れ墨っぱいのするのか？」

帝が沢田の体の文字をまじまじと見る。

「み、帝君！そんなまじまじと見ないで——！！」

沢田はドク口病というのにかかったらしい。かかると人に言えないヒミツなどが体に浮き出るらしい。

ぷっ

帝と沢田が言い合っていると、後ろの方から吹き出す音が聞こえた。

蒼だ。

「はははは！お前うるう年知らねーの？」

「な、なんで見えるの！？こんなに離れてるのに！」

確かに沢田と蒼は3メートルくらい離れてた。

「オレ視力いいんだよね。確か2・1はある」

「ええええー！ー！？そんなに！？」

「かわいそうに、集団競技85連敗中って…100連敗したら祝つてやるよ」

「いらないー！ー！」

そんなところに変なおっちゃんが入ってきた。

「お？こっちの子も綺麗だねー。チューしちゃう？」

「ち、ちよつとシャマル！」

沢田が慌てて止めようとするがシャマルとやははこっちに飛んできた。

まあこれも…正当防衛になるよな？

「最悪過剰防衛くらい受けてやる！」

そう言つと

バキッ

ドガッ

ドゴーン……

効果音だけじゃわからないっすよね。

蒼の右足がシャルの首にヒットして、腹をグーで殴り、一本背負いを食らわせ、シャルを吹き飛ばした次第であります。

「いやー、やっぱおてんばな子はかわいいな」

ピキッ

「ねえ帝……あれはオレに殺せって言ってるんだよね……？」

「いや、気持ちは分かるけど落ち着け？みたらし後で買ってやっから！」

「ホントか！？よし帰ろう、今すぐ帰ろう！」

そついいシャルの横を通るときボソツとシャルにつぶやいてから家を出ていった。

その後沢田は無事にシャマルに治療してもらい、ドクロ病は治ったとぞ。

「ねえシャマル、どうして急に治療してくれる気になったんですか？」

「ああ、さっきのおてんばちゃんに言われたんだよ、

お前、初めて女の子と話したのが京子ちゃんだったんだな……」

「ほっという……!!」

ダメっぷりが珍しく役に立った日でした。

「やっぱり団子はみたらし」

「ゴマもつまいのに」「ボソッ

「…なんて？」

「なんでもございません。」

どうやら帝はゴマ派のようです。

第14兩

オレ、シャマルと会う！（後書き）

こんちゃー！なんかツナと少し仲良くなった蒼でしたー。

この前この後書きコーナー読んでくれた方が感想くださいます。

団子の話の時はみたらし派の方がたくさんいらしてうれしかったです（笑）

その時にゴマも3番目くらいに好きと話してくれた方がいて。
帝君に採用しましたあ！

ゴマもうまいっすよねー。

そういえば新しく小説を出しました！『佐藤家の7姉弟の日常』
というやつです！コメディです。というか霧宮はコメディしか書けません。恋愛系はむずかしいです。でも少し頑張ってみようかなとも思ってたりにして…。にじファンの方から見れるので、よろしければ見てやってください！

なんか後書き長いな…

第15兩

オレ、ドジ野郎と会う!!

「な―な―帝―。七不思議聞きたい？」

「聞きたくね―けど…聞かれると気になる。」

「あのな……」

「この学校にいと朝からガツポリ記憶がなくなる!!」

「いやお前が寝てるだけだから!それ昨日も言ったから!」

「いや、オレ今日は寝ていないと思う。」

「いや、爆睡だった。ほんと尊敬するくらい。」

「いやいやドーモ」

「いや。ほめてねーし？これも昨日言っただし？」

「いや、オレにとっては最高の褒め言葉だし？」

「お前だいじょぶか？寝過ぎだ。絶対寝過ぎだ。」

「1日の24時間中12時間は寝るためにあるんだ！！」

「ハハハッ、蒼と帝は何コントみたいな事してるんだ？」
山本が蒼と帝に近づいてくる。

「オレはコントをしてたんじゃなくて帝に睡眠について教えてやってたんだ！」

「オレは聞かされてたんだよ」
「端から見たら思いつきコントなのな。」

山本が笑いながら言う。その後なんだかんだで山本と帰ることになった。

並盛商店街通って帰っていると…

「あっ！」

蒼が少し先の店を指差す。

「ん？何かいい店あったか？」

帝が蒼の指差した先を見る。

「ああ！」

団子屋！！」

結局みんなで団子を買ひ、また商店街を歩いていく。

「あ！」

またまた蒼が何か見つけたようです。

「今度はなんだ？甘味所か？」

そう言いつつ蒼の指した先を見る。

「ちげーよ、マキさんの店！久しぶりだな。入ろうぜ！」
二人の意見も聞かずにスカズカと店内に入っていく蒼。

「付き合つてやつてもいいか？」

「もちろん！全然構わないぜ？」

申し訳なさそうに聞く帝に山本は笑って答える。

「マツキさん？いるー？」

ここはマキさんの家か？とツツコミをいれなくなる。

「あら、蒼ちゃん久しぶり！元気そうね！だけど…」

洋服屋は基本食べ物を持ち込まないものよ？」

蒼はまだたくさんのみたらしを持っていた。帝と山本は一本ずつだったのだが、蒼だけ10本買ったのだ。団子なので早食いするわけにもいかない。詰まらせたら大変だろ？でも確かに。

店には持ち込んだじゃいけねーよなー。

「ごめん。すぐ出る。」

「えっ、ゆつくり話したいのに。あ！そつだお客さん待たせてるんだった！すいませーん！」

そう言いパタパタ遠くの方へ走っていく。
おいおい、お客放っぽいたらだめだろ…

「知り合いだったのか？もう少しゆっくり話しても構わないぜ？」
「いえいえそんな…」

どうやら男の客らしい。どれ、少し顔のぞいてみるか。

ちょこつとのぞいてみる。

若い男で、金髪の少しはねた髪。フードにファーのついたコートを
着ていて、まあそこらにいなそうな若者って感じだ。

でも…

どっかで見た事があるような…

・ ・ ・ ・ ・

「あ――――！！！！！！」

突然叫んだ蒼に驚く人々。

「お前あれだろ！！なんだっけ、キャバッローネとかいうマ…」
「ちよつと来い！」

蒼が言い終わる前に金髪男に連れ出される。

店を出ようとその男が蒼をつれてドアを開け出ようとする。

ガッ

男が店のドアのわずかなでっぱりにつまづく。

あー…こいつ…

ドジなんだっけ……

「お前何もんだ？」

「そこらへんにいる一般人。」

あからさまな嘘をついてみる。ホントの一般人ならそんな事知らないわな。でもそりゃ漫画で見た顔そのまんまの人が目の前にいたらねえ…？

「嘘だろ。一般人が知ってる情報じゃねえ。何処のもんだ。」

こっわーい（笑）もう疑問系じゃないし。でも

「さーな？てめーに教える義理はねーよ。一般人にもバレるようなセキュリティなんじゃねえの？」

少し笑ってから言う。これは少しずるいかも。実際ハッキングしたわけじゃないし。今度してみようか。結構得意なんだよねー」

はたしてホントにキャバッローネのセキュリティは甘いのか！！気になるー」

「ま、いや。これからも会うかもしれないからそんなときはよろしくなー」

ヒラヒラと手を振り驚いてるような怒ったような顔のディーノを置いてマキの店に戻る。

「蒼ちゃん、お客さん連れて何処言つてたの？おつり返してない！」

店内に入るなりマキに問われる。

「帰ったぜ？つりなら貰っちゃえば？帝、武、帰ろーぜ。」
そう言つてまた店を出る。

「悪いな山本。うちのわがままお嬢様が。」
「にぎやかで楽しいのな！」
心の広い山本達でした。

ちなみにこの後ディーノはツナの家に行き、ツナと初対面した後にそのドジっぷりを発揮するのだった。

第15兩

オレ、ドジ野郎と会う!! (後書き)

今回は長く書けたかな？

ディーノ出てきましたねー。キャラ違ったけど…

蒼と仲良く(?) になりましたねー。キャラ違ったけど…

第16兩

オレ、マフィアランドへ！

「あーーーーー。」

暇！
」

蒼のこの言葉が始まりだった。

「いや暇って言われてもな。今日休日だし。」

帝はメガネをかけ、雑誌を読んでいる。

「何かこう、ズガンズガンって感じの事おきねえの?! 平凡！」

前跳ね馬に会ったけど結局何もなかった!!」

「いや、ズガードゴーンてのが起こる方がおかしいと思うけど!？」

「うっせ、黙れ!メガネ似合ってないんだよ!」

「今日初めてかけたんだよ!黙れメガネ子!」

「これはパソコン代わりだ!ヘッ、自分が似合わねえから悔しいんだろ!」

蒼が帝の方に前かがみになり、メガネを少し上にあげる。

確かに蒼のメガネには度が入っていない。実際は目がいいからだ。

「そーだ!このメガネで原作読んで今日何かやってないか調べてみつか。」

そう言いメガネの電源をつける。

「えっと…これは一週間前…これが二日前…今日は…」

マフィアランドだー!!」

「着いた???!!マフィアランド!!」

原作によると今日この『裏マフィアランド』ってとこで戦争が起みこるらしい。そら行くしかねーだろ!あとなんかコロネロとかいう狙撃手も強いらしい?来るしかないっしょ?

「こうなると思ったから言わなかったんだよ…」
どうやら帝は今日戦争がある事を知っていたらしい。言ってくれ
ばいいのによー。

うし。裏マフィアランドに向かうか。

ズガン!

ズガガン!

「うし。あっちか」

「おいちよつと待っ!」

「……いねえし。オレは何も知らないオレは何も知らないオレは何も……」

帝はそう言いマフィアランドの喫茶店に向かった。

後でマフィアランド全体の騒ぎになる事を忘れて……

蒼はもう裏マフィアランドまで来ていた。

「おーおーやってるやってる」

木の上からリボーン、コロネロ、ツナのやり取りを見ていた。

「確かあのバンダナ巻いたライフル小僧がコロネロだったよな…よし！」

蒼は二股に分かれた木の枝を折り、下の小石を拾った。そして髪の毛をちぎって二股に分かれた枝の両端に結ぶ。

いわゆるパチンコをつくった。

「さあーで、実力はどれほどか…な！」

小石がとてつもないスピードでコロネロに向かう。

「誰だコラ！」

コロネロが石の方向に銃を構える。

ズガガン！

一つの弾は石に。

一つの弾はさっきまで蒼のいたところに。

「さっすがー……アルコバレーノ。」

「オレの弾を避けるとは何者だ！コラ！」

木から降りていた蒼が三人の方に歩いていく。

「き、霧沢さん！？なんでここに！？（髪ほどいてたから一瞬誰だかわかんなかったよ）」

「うるさい」

そう言いコロネロの方に歩いていく。

「なあ。あんた最強なんだって？」

「だったら何だ！コラ！」

「オレと狙撃の勝負しようぜ」

「乗ったぜ、コラ！」

コロネロが笑って答える。

場所を移動し、蒼の分のライフルが用意される。どうやらここはシ

ユミレーションルームというらしい。部屋はムダにだだっ広く、真っ暗だ。パツと明かりが着く。

「おお」

なるほど。こういうことか。

部屋に明かりが着くと周りは高層ビルの中だった。

「ここではあらゆる状況で殺しの訓練ができるんだぞ」

「何物騒な事言ってるんだよ」

沢田は相変わらずおどおどしてる。

「ルール。どうする？」

「それはオレが決めたぞ」

そう言いりボーンが蒼の目の前に来る。

「ここでお前とコロネロが順番に撃っていくんだ。ターゲットはどんどん遠ざかっていくぞ。ターゲットを撃ち抜けなくなったら負けだ」

「賛成」

「オレも賛成だぜ、コラ！」

「じゃあ始めるゾ。まずは2キロからだ」

「んじゃオレから」

ジャキ

蒼がライフルを構える。

さあさあ楽しい時間の始まりだ♪

第16兩

オレ、マフィアランドへ！(後書き)

長くなっちゃうのでいったん切ります！

コメントくれたらうれしいです！

なんて…

第17兩

オレ、コロネロと競う!?

?マフィアランド?

?喫茶店にて?

「ふー。」

帝はカフェオレを飲んでくつろいでいた。

「蒼がいないとこんなに静かなんだなー。」

そう言い空を見上げる。

「今頃蒼は裏マフィアランドで暴れ回って破壊しまくってるんだろ
うな……」

ズガガンッ

「蒼、50kmクリアだぞ。次はコロネロだ」

ズガガンッ

「コロネロもクリアだ」

帝の予想は半分当たってるが半分ハズレだ。確かに蒼は暴れていたがシュミレーションルームのおかげで破壊はしていなかった。

「次は65kmか。絶対勝ってやる」

蒼が銃を構える。

「（ひい）。1km先の人を撃ち抜けるだけ十分スゴいよ！！」
ツナは二人が撃つたびに「ひい！」とか「ひゃ！」とか情けない声

を出していた。

「（まったく、男のくせに）」

蒼が呆れながらスコープをのぞく。

「ふっ」

ふいに蒼が笑った。ツナは不思議の思い首を傾げる。リボーンはニツと笑った。

「（アハハハハ！ヤバイこれウケる！ターゲットが沢田！？）」
そう。ターゲットの顔は毎回変わっていたのだが沢田の顔に変わったのだ。

「ツナも見てみるか？」

リボーンに双眼鏡を渡される。

「んなーーーーーーー！？なにこれ！オレ！？」

沢田は相当驚いたようだ。

ズガンッ

それでも容赦なく撃つ蒼。

「あー！オレー！ー！！」

双眼鏡をのぞきながら再び叫ぶ沢田。

「フンッ」

蒼はライフルを片手で持ち、肩に置いてもう片方の手で腰上まである髪を払う。そしてコロネロに挑戦的な目を向ける。

「次はアンタだぜ」

「上等だ！コラ！」

コロネロが的に銃を向け、引き金を引いた?????

ドガアアアアン！！

「う、うわあ！何だ？」

沢田がうるたえる。リボンとコロネロは慣れているのか冷静だ。

「（来た来たあゝでも知らないフリしねーと…）戦争か！？」

「こんなことすんのはあいつくらいだぜ！コラ！」

「そーだな。アルコバレーノ

スカル。」

「そんじゃ、オレは…全滅さしてくる」

「「！！？」」」

「大丈夫大丈夫！殺しはしねーよ！」

「そーゆー問題イイイ！？？」

さてさて勝負は持ち越し

「楽しいショーの…始まりだ」

第17兩

オレ、コロネロと競う!?（後書き）

こんばんは！更新遅れて本つつ当にごめんなさい！！

わたくしの成績が…悲劇を起こしているため、更新が遅れてしまいました…

これからも遅れる事もあるかと思いますがよろしくお願いします！

帝：ていうかオレ全然出てないー！

次はトップバッターでだしてあげますよ。

蒼：ていうか短っ…

すみません…次は努力しますー！

第18雨

オレ、戦争に参加？

？喫茶店？

「戦争だー！！」

「！？」

男が叫んで店内に入ってくる。外も騒ぎになっているようだ。そりや騒ぎになるだろう。戦争なのだから。ならなかったら日本国民はどうかしている。人々が悲鳴を上げて店の外に逃げる。

「客は広場に避難しろ！その他はマフィア城に逃げ！！」

奥からその店のオーナーが出てきて呼びかけるが客は逃げ惑うばかり。

「そうだ…今日は戦争の日なんだっけ…だから蒼があんなにイキイキしてたのか…あー…もう！

蒼が嬉しそうにしてる時は悪い事しか起こんねえよな」

カフェオレを飲んでつぶやく。結構砂糖を入れたはずなのに少し苦かった。

「あんた！そんなに落ち着いてるってことは関係者だな！？マフィア城に行くぞ！」
さっきのオーナーが近づいてきて帝に話しかける。

「え、いや、違…」
久々に銃がぶっ放せるんだ！腕が鳴るぜ！なあ！？」

断ろうとした帝の声を遮るようにオーナーが言い、強引に帝を連れて店を出る。

「だから…違うつつつてんだろー！ー！ー！」
そんな叫びも銃声で空しくかき消された。

「おーおー、良つく見っえるー♪」
マフィアランドで一番高い木の上に立つ。ちょうどスカルの艦隊とマフィア城の間くらいなので双方の動きがよく見える。スカルの方を見ると大ダコを連れて船から降りるところだった。マフィアランドの方ではツナが最前列に立たされ、もう顔真っ青。

「んー。まずはスカルの部下でいつか。」

蒼は木から降り、スカルの艦隊から5キロほど離れた所に移動した。

「さてさて…まずは姿を見せとかないと…ね！」

息を思いっきり吸って…

叫ぶ。

「無能なアルコバレーノの部下さーん！これからあなた方の艦隊を沈めます！命が惜しけりや避難しなさーい！」

蒼の声はとても良く通り、部下達にも聞こえたようだ。

「沈める！？」

「まじかよ！降りようぜ！」

「待てよ、あんなところから撃てるわけねーだろ。当たんねーよ」

ブツブツつぶやいていたが最後に言ったやつのかえに同感らしい。

「はあ？おれの弾がてめーらのところに届かない？オレの愛用ルベル M1886 なめんなよっ！」

ガンッ

弾が船に向かっていく。

ドガーーーン

「な、なんだ！？」

「エンジンが狙撃されたようであります！」

「消火だ消火！早くしろ！」

「間に合いません！」

急に騒がしくなってきた艦隊。

「わー、これだけでこんなに騒ぐとは。驚きー。他の船の部下達にも下船してもらわねーと」
機関銃に持ちかえる。

「さてと、お次ぎはM60機関銃で！」

ズガガガガガガガガガ

連射し続ける。そのたびに艦隊の方からは爆発音が聞こえてくる。

「ふー。終了！艦隊、全滅！」

沈んでいく艦隊を見ながらつぶやく。

「あらら。思ってたよりヒトが多いなー。スカルと大ダコはもう行っちゃったし？」

ザコを沈めるか。」

スカルの手下、150人くらいは沈んでいく船を呆然と見ていた。

「な、何だったんだ…まさかあの距離から！」

「まさか全部のエンジンを狙撃されて沈められるなんて…」

「とにかくスカル様にお知らせしなくては！」

部下の中のリーダーがスカルの向かった方を向く。

「行かせるわけにはいかないんだなあ」

蒼が立っていた。

「そこをどけ！」

「だからどかないっての。」

「なぜだ！」

「行かせたら多分スカルにオレの事知られちゃうでしょう？そしたら原作が変わっちゃうかもでしょう？そしたらヤバいの。オレも天野 先生に怒られちゃうかもしれないでしょ？」

「？？知らんが 意味がない気がするんだが…」

「！……ん、んな事いいだろ！話をそらすな！」

「お、おう。」

「そんなわけで！」

ちよつと痛いけど、我慢しろよ？。」

何処からともなくクナイを取り出す蒼。どこからそんなにクナイが出てくるのか聞きたいところである。獄寺も同じだが。

「雨風！」

次の瞬間蒼の手からクナイは消えていた。部下達は惚ける。

「何をしたんだ？」

「失敗か？」

次の瞬間

部下達の足から

紅い血しぶきがあがる。

「！？」

「ぐああ！」

「ぎゃあああああ」

次々と倒れていき、もがき苦しむ部下達。

「大げさな。足だし手加減してやったんだ。殺さないって言ったじゃないね。」

そう言うときスカルの方を向く。

「オレも向こう行こー。」

蒼が歩き出す。

血溜まりを後にして。

第18兩

オレ、戦争に参加？（後書き）

やっとアップできました！マフィアランド長いな…

次で終わらせます！

んで…

黒曜編です！

第19雨

オレ、ケンカに参戦！…未遂？

スカルの部下達を残し、蒼はスカルを追う。

「んー。まだ終わってないといんだけど。」

蒼は漫画の原作で見た場所に行ってみる。

そこには大ダコと大ダコに捕まってるリボーン。

「あら。アルコバレーノもこんなもんか？」

蒼は木の上から見物する事にし、頬杖を着いて眺めている。

ズガンッ

リボーンがタコの腕の隙間からスカルに向かって銃を撃つ。

「！！」

これはスカルも考えていなかったように左腕に弾が当たる。リボーンが撃つたのは特殊弾。スカルの左腕はふくれあがり、大ダコはスカルの命令がわからずオロオロ。

でかい図体してオロオロしてんなよ。

蒼は呆れながらその様子を眺める。

「くそつ。こうなったら艦隊で！」

「残念だったなスカル。艦隊なら今コロネロがつぶしにいつてると

「ころだぞ。」

「え。コロネロ先輩が!？」

「その必要はなかったぜ、コラ！」

コロネロがワシにつるされて? 戻ってくる。

「どういうことだ？」

「オレが行った時には艦隊はもう沈んでて血溜まりと苦しみもだえる奴らだけだったぜ、コラ！」

「血溜まりーーーーー!？」

沢田が青ざめて絶叫する。

たびたび思うのだが近所迷惑の通報とか来ないのか? あ。ここは森か。でも絶対一回は来てる。

おっと、話がそれた。

「だろうね。艦隊はさっきオレが沈めたし。血溜まりはメット野郎の部下のдар。殺さないように足撃ったからな。手加減してやったんだ、感謝してほしいね。」

蒼は腕組みして言う。スカルは艦隊が沈められた事が信じられず全く動かない。

「まさか本当に全滅させてくるとは思わなかったぜ、コラ！」

ようやくスカルが我にかえる。正直遅すぎ。

「ハッ。オ、オレの部下をやったのはテメーか！コノヤロー！か、
覚悟

バンッ

スカルのすぐ後ろの木に弾がめり込む。10mほど離れていたが蒼にとつては1m先のダーツに矢を当てるようなものである。スカルの頬に冷や汗が伝う。

「黙れ？」

蒼がにつこり笑ってスカルに言う。沢田はヒーヒー言っでさらに青ざめているが知ったこっちゃない。蒼は銃をしまい、マフィアランドの方へ歩いていく。

「じゃーな。お先に。帝が待つてるんでな。バンダナ小僧との勝負、
楽しかったよ。」

「お前もなかなかだったぜ、コラ！」
そりゃどーも。ひらひら手を振り歩いていく。

「やっぱりあいつおもしれーな。ファミリーに入れるぞ。」

「えー！ー！ー！ー！ー！き、霧沢さんを？！ムリムリムリムリ絶
対入ってもらえないよー！ー！ていうかオレボスにならないし！ー！」

「黙れダメツナ。」

「ひい！す、すみません……」

マフィアランドの喫茶店に行ってみると帝がカフェオレを飲んで
いた。

「お前ホンツツト、トラブルメーカーだな！」

「別に今回のことは元々起こることだったし。帝に迷惑かけてねー
し。」

「お前には何言ってもムダだったな。」

帝はため息をつき、飲み終わったカップを置く。

「帰るか」

「おう」

二人でマフィアランドを出る。

日はすっかり沈み、

大騒ぎの一日が終わる。

はずだった。

「はーらへつたあはーらへえたー。おこしにつけたきびだんごー。ひつとつーわたしにくださいなー。あーげまつせんーあーげまーせんー。おこしにつけたきびだんごー。あなたーにあげるーわっけがないー」

「…あげないの？」

「あ？」

「いや、きびだんごあげればよくね？元は桃太郎の話だよな？桃太郎仲間できないよ？」

「知るか。あげたら自分の分なくなっちまうだろ。」

「えー……」

「それに食いもんで釣るってのもひどい話だろ」

「…確かに」

「…納得しちゃうのかよ…」

帰り道。そんなたわいもない話をしていた。

んー…きびだんごとか言ってたら腹減ってきたな。

「帝。腹減った。コンビニ寄る。先帰ってて。」

「へいへい。ロボットかよ。一文でまとめろ、一文で。」

「帝ー腹減ったーコンビニ寄るー先帰っててー」

「伸ばしただけじゃねーか!」

そんなこんなで別れた二人。蒼はコンビニに向かつて歩いていく。辺りはすっかり暗くなってるので街灯の光だけがたよりだ。

「ん? 誰がいる」

街灯の下で二人の男がもつれ合ってる。制服を着ているところから蒼と同じ年くらいらしい。

ケンカか…

「加わるしかないっしょ!!」

自然に二人に近づいていく。

「ひ、ひいい!ホ、ホント勘弁してください!」

「んあ!?!んな事言われても上からの命令なんら、仕方ないびよん
!」

ん?この馬鹿な言葉使い聞き覚えがあるな...?

第19兩

オレ、ケンカに参戦！…未遂？（後書き）

中途半端ですんません！あの言葉使いつていったらあいつですよね。
あんな言葉使い
の人そうじゃないですね。

お時間ある方はコメントお願いします！

第20兩

オレ、ケンカに参戦！！まじで！

聞き覚えのある話し方に疑問を抱きながら蒼はまたポニーテールに髪を結び、キャップを深くかぶる。

「お兄さん、面白い事してるね。オレも入れてよ。」

「んあ！？なんらダメー！」

「さあね？通りすがりの人？」

蒼は笑いながら首を傾げる。すると殴られていた方の男が目を見開く。

「お、お前霧沢！霧沢蒼か！？」

男が蒼を指差して言う。

なんで知ってるんだ？知らねんだけど　こいつ。

「？誰だてめー」

蒼が屈んで男の顔をよく見ようとする。

「！ああ。あんた風紀委員か。」

腕に腕章がついてる。雲雀サン関連か。それにしても何でわかったんだ？

「何で風紀委員サンがオレの顔知ってるわけ？」

「い、委員長が、霧沢蒼を見つけたら連れて来いと…」

あー。納得。

「よーするに。リベンジってわけね。なーる。前世ライオンが負けて黙ってるわけないわな」

蒼のこの言葉を聞いて変な言葉使いの男が蒼の方を見る。

「！？てめーがアヒルに勝ったびょん！？」

「？ああ。（だーれだったかな？こんな言葉使い忘れるはずないんだけどな…）」

「…予定変更だびょん。まずはてめーをぶつ殺す！んれ骸様の土産にするびょん！」

骸…？

「あああああああああ！ー！」

二人が飛び上がる。

「おっもいだした!!お前、あれだろ!ナツポーと一緒にいたあの犬!あー!そうだそうだ!すつきり!」

あーホントすつきり!それじゃあ…

「ケンカ……しよつぜ」

そうそう。原作読んだ時にいた。新人類？みたいな生き物。

「コングチャンネル！」

わお！ゴリラになった！すんげー！最早人類じゃないかも！

おおおお攻撃してきた！ふーん、カモゴリラと同じくらいになるんだ…

地面凹んじやったよ…

のんきな事を考えながらゴリラの攻撃を避け続ける。簡単な気がするが実際ゴリラの攻撃を避けるのは至難の業だ。

…と蒼が言っていた。

「避けてるだけじゃ勝てれーぞ！？」

（？□？）？喋った！！え、ゴリラ姿でも喋れるのか！？…こい

つ絶対動物園で働いた方がいい！『喋れるゴリラ』って絶対儲かる。オレが売りつけてやりたいくらい。

あ、今戦ってる最中なんだっけ。

確かにゴリラの言う通り避けているだけでは勝てない。疲れさせてから倒すのもいいがゴリラのスタミナが切れるのを待ってたら朝日が昇ってしまうだろう。

ゴリラって毛深いし手加減はしなくていいよな。

「んじゃお言葉に甘えて。」

シャキッ

何処からともなくクナイを構える。

「雷蝶らいちょう！！」

大量のクナイがゴリラに迫る。

ドドドドドドッ

「??」

そのクナイのすべてがゴリラに命中し、

血が噴き出す。

それでもゴリラはまだ倒れない。

「！まだ倒れねーか。さすが頑丈な身体してやが

ドサッ

ゴリラが仰向けに倒れる。

「フー。良かった。ホントに化けもんかと思った。でもまだ意識はあるか。」

蒼がゴリラの傍にしゃがむ。

「ゲッ、バレたびょん。」

「別にとどめを刺す気はない。こんなところに死体なんて転がってた問題になるだろ？一つ質問したいだけだ。」

「あんな名前なんだったつけ。」
「…んあ」

「いや、悪い。一回聞いた事はあるんだよ。でもなんか思い出せないくつてな…動物チックな感じの…」
「（動物チックくてなんだびょん）…犬^{けん}」
「そうだ！犬^{いぬ}だ！ワン公！OKOK！」
「いや犬^{けん}らって言ってるびょん！」

「ワン公の方がかわいらしくていいぞ？」
「可愛さ求めてるわけじゃないびょん！」
「わかった。犬^{いぬ}」

「犬^{けん}らっつの！」

「めんどくせーな、ちっせーことは気にすんな！」
そう言いうつぶせになってる犬の腹を叩く。

「つつつ！！？」

「あ、わり。ケガしてたんだっとな。だいじよぶか？」
オレがつけた傷だけど…ま、まあ気にすんな！正当防衛だ！……過
剰防衛か？

「そーだ。ナッポーによく伝えといて。あと。この顔よく覚え
ときな。近いうち会う事になるだろうしな。」

蒼がキャップをとる。犬が自分の顔を見たのを確認するとまたキ
ヤップを深くかぶる。

「じゃーな。ワン公。無理せず帰れよ。」

「無理なんてしねーし！」

ヨロヨロと犬が立ち上がる。そしてフラフラ歩いていき

…電柱に激突。

「！ハハッ『犬^{いぬ}も歩けば棒に当たる』」

「うるへー！」

そう言い家に戻ってく。

「おつそー……………い!!」

「わ、悪い。帝。でも30分くらいだろ？」

「30分もだ!って何だお前その返り血。」

「ん？」

自分の服を見る。見事に血だらけだ。

あちゃー。さっきのワン公の時か。

「ほら脱ぐ風呂に入る洗う!T-シャツはオレが洗つといてやるから。」

「洗濯機でいいじゃねーか。」

「お前のT-シャツ1枚洗うために洗濯機なんてもったいいねーよ。オレの手洗いで十分だ。水がもったいいねー。」

「母ちゃんみてえ。」

「言つな。」

「ていうか帝って一応神なんだしお金くらい作れんだろ。」
「あ……オレって神だっけ……」

いや。それ以前に金は作ってはいけないかと。

長い一日がようやく終わる。

第20雨

オレ、ケンカに参戦!!まじで!(後書き)

こんばんは!お久しぶりです。

これからテスト期間のため更新が遅れます!すいません…

コメ&感想よろしく願います!

第21雨

オレ、浅野にいらつく♪

…何これ。なんでオレはたくさんの

風紀委員に囲まれなくちゃいけないかな。

オレこんな人相悪い人達にモテても嬉しくもなんともないんだけど。

今日は黒のパーカを着てきていたのでフードを深くかぶる。

「…なんかオレに御用で？」

「委員長がお呼びだ。応接室に來い。」

リーゼントが一番長い人が答える。

リーゼント長過ぎね？最早武器になるよアレ。頭突きしたら絶対刺さる。

…ヤバイ、笑えてきたww

「断るって言ったら？」

風船ガムを膨らましながら聞く。

「力ずくで連れて行くまでだ。」

あ。割れた。

「交渉決裂だな」

風紀委員の人達が一気にかかってくる。

さすがに校内でクナイはヤバイよな。今度学校でも使える武器考えねーと。雲雀のトンファーとか考えたよなー。アレ打撃だし。斬撃は問題になりそう。

ん？…何にしょ。

そんな事を考えてる間にも風紀委員が迫ってくる。

「あーあ。ご愁傷様。委員長の言う事聞かなかったら無事だったのに。あ。でも断ったらそこで雲雀サンにやられちゃうのか。うっわ、かわいそ。」

「（くそっ、なんでこいつこんなに余裕なんだ！？）」

風紀委員の攻撃は空ぶるばかりで疲れてきたのか息が上がってきている。

「ハーツハーツ。つくそ！」

蒼は余裕ちゃくちゃく。でもやはり暴れたらしく、指をコキコキ鳴らす。

「まったく…今日は予定があるつてのに…反撃開始！」

その後は10秒程で終わった。周りの人達は途中から恐ろしくなり、裏門から登校する始末。

まあ、当たり前か。

倒れている数十人の内の一人の襟を掴み、立たせる。…最早吊るさ
れている状態で立っていないが。

「アンタらの委員長に伝えな。『霧沢蒼を呼びたかったらテメーが
来い』ってな。」

そう言い手を離す。その委員が崩れ落ちる。

「風紀委員も弱すぎだよ。もっと強くしとかないと。」

懐中時計を取り出す。

30分経過していた。

「あーあー。もうこんな時間だ。一回武とか隼人に会ってから行こ
うと思ったんだけど会う時間なくなっちゃった。何のためにガッコ
来たんだか。」

校門を出て行こうとする。

「ま…待つて！」

あー。オレが一番聞きたくない声だ。

「何の用。……浅野望。」

振り返ると浅野が立っている。

オレなんかしたか？

「あの…あなたも“転生者”でしょ!？」
「だったら？」

「えっと…その…」
声をかけたところまでは上手くいったが、その先どという風に言うか決めていなかったらしい。モジモジして中々言おうとしない。

ん…。段々いらついてきたぞ」

「何？」

「あ、あの！転生者だったら！あまり原作を狂わせない方がいいんじゃないかな、って…」

はあ？いきなり何言い出すんだこいつ。最後の方あんま聞こえないし。

「主要人物とかに近づきすぎたら物語変わっちうかなって…」

ああ。『主要人物』って武とか隼人とかクロームとか？ははは！…馬鹿らし。

「なにそれ。馬鹿らし。自分の生きたいように生きて何が悪いわけ。」
「言ってやると反論されるのに慣れていならしく、身じろぐ。」

「で、でもこの世界にはシナリオがあるから！変えたらダメだよ！」

あー。もうダメ。

「さっきつから“物語”だの“シナリオ”だの何なんだよ。先は誰にもわかんねえってのによ。オレらはまあ原作読んじまったけどその通りに生きてるだけなんてただの人形^{マリオ}だ。」

「でも私たちは他の世界から来たんだし…出しゃばらない方が…」

もっさ…本当なんなのこいつ。死んだ奴の身にもなってみろっての。

蒼はわざとらしく大きなため息をつき。腕を組む。

「オレは転生したんだ。アンタさっき『あなたも』つつったよな。一緒にすんなよ？」

片足重心で笑いながら言う。呆れからくる笑いだ。

「あんたは“トリップ”だろ？いずれはもとの世界に戻んだよ。旅行したら元の場所に戻ってくだろ？オレは転生だ。意味わかるか？」
浅野は全く意味が分からなかったらしく、首を横に振る。

「だよな。おれは転生つつたろ？一回死んだんだよ。」

浅野が水を打たれたような顔になる。まあ、神サマの間違いだったらしいけど、と付け足す。

「間違いでも死んだって事はもうその世界にいれねーの。今頃オレらのいた世界ではオレの葬式でもやってるさ。」

浅野は下唇をギュツと噛む。さっきの“戻らなきゃいけない”というのがひっかかってるのだろう。

「アンタが武の事をどう思ってるかは関係ねーしどうでもいい。オレの事が邪魔だったら消せばいい。たぶん“ヴァリアー編”とやらで敵になる可能性は高いからな。まあ勝てただけだな。」

武の事は凶星だったらしく。赤面してうつむく。

「じゃ。オレ用事あつから。」

今度こそ校門を出、歩いていく。

残された浅野は怒りで拳を震わせていた。

なにあれ。何あれ何あれ何あれ！『武の事をどう思っただけでも関係ねえ』！？武君の事馴れ馴れしく武なんて呼ばないで！きっと武君は優しいからしょうがなく付き合っただけであげてるんだよ。

あ…。そうだ…。あいつも言っただけ…。

ヴァリアー編であいつがヴァリアー側に行ったら、私はボンゴレ側であいつを消せる…。

誤って攻撃するところを間違えて。

泣いて謝って。

それで武君に慰めてもらおう。

最高の手じゃない？これこそ一石二鳥ってやつよね。

それまでの辛抱よね？

狂い始めた醜い少女。さてさて彼女の行く末は？

一方蒼は一人歩き続け、とある場所にたどり着いた。手みやげを持ち、建物の真正面に立つ。

「やっと着いた…」

黒曜ランド。
「

第21兩

オレ、浅野にいらつく。(後書き)

こんばんはー。今日は霧宮に変わって蒼がこのコーナーをやる事になりましたー。

どんだけめんどくさがり屋なんだよこの作者。

ていうか『霧沢』と『霧宮』ってなんかかぶってね？パクリだパクリ。

今回は結構長く書けたと思います。これからも読んでくれるとうれしいです！コメントも良ければお願いします…。あおもお便りお待ちしております…？

って霧宮！何言わすんだコノヤローー！！

すみません。読んでくれてありがとうございます！

霧宮。

第22雨

オレ、骸に会う！

黒曜ランドに入っていく。原作通りオンボロである。お化けでも出てきそうな雰囲気である。

「確かほぼ最上階にナツポーはいるんだよな。」
階段へ向かう。階段に行き着いてみると既に破壊されていた。確か沢田達が来るから一カ所以外ぶっ壊されたんだっけ。

…その一カ所探すのちょーーーーーめんどい。

飛ぶか。

階段はおよそ3mくらい壊されていて、オレの手を伸ばした時の身長は2mとちょっと。つまり1mくらい飛べばいいんだろ？

らくちんらくちん♪

まあヴアリヤーとかいう奴らにはおよばないかもただけで飛ぶ事に関しては自信あるんだよな！。

あれ。

ヴァリアーだっけ。

どっちでもいつか。

蒼は軽々と階段を飛び、さらに上へと進んでいく。そして??？映画館へとたどり着く。確かここに集まってるんだよな。

ギイイイー…

ドアを押す。不気味な音をたてながらドアが開く。奥にはソファ。

そのソファの背もたれの上には…

「パ…パイナップル？」

パイナップルが乗っていた。

何で背もたれの上にパイナップル？何あの絶妙なバランス。暗くてあまりよく見えないがあれは絶対パイナップルだと思う。うわっ。パイナップルが動いた！

パイナップルが浮いたかと思ったら首、胴体という風に全身が見えてきた。どうやら人の頭だったらしい。

頭部らしからぬ頭部である。なんとややこしい。

ナッポー頭が近づいてくる。

「クフフフ…第一声がパイナップルとはなめられたものですね。」
近づいてくるにつれ、顔が見えてくる。確かに原作通りの顔である。不細工ではないらしい。

つまんねーの。

ていうか、なめるも何も純粹な感想を述べたまでであって。それにしてもなんて見事なパイナップル…。影絵のパイナップル役に適任だと思っただが。

「声に出てますよ。」

「まじ？どのへんから？」

「『ていうか』から全て。」

「まじ？思考回路丸見えじゃん。」

「今日は何の御用で？」

ああ、そうだった。用があつて来たんだよ。

「契約。」

「ほう、どのような」

ナッポー頭がソファの方へ戻っていく。

蒼もソファの方へ近づいていく。

「一人の女についてだ。」

ナッポー頭がソファに腰をかけ、足を組む。

「一人の女をお前の仲間に入れてやってほしい。」

一人の女とはクロームの事だ。

始め会ったときに気がついた。まだクロームはナッポーと出会ってないはずなのに

クロームはもうクロームだったんだ。

風だったころクロームは大けがし、一部の内蔵と右目を失った。

まだナッポーと出会ってないとしたら彼女の内蔵は誰が？

誰がクロームの内蔵を作っているかは知らない。

でも確かなのは原作でクロームがナッポーを本気で尊敬してた事。

そしてオレのせいで変わってしまったかもしれない事。

クロームのナッポーに対する気持ちは変わってほしくない。

ましてやオレのせいで。ナッポーは一瞬驚いた顔をし、大爆笑した。

「クハハハ！何を言われるかと思えば！無理な相談ですね。」

「待てよナッポー。条件も聞いてみたらどうだ。」

「待ってください。何ですかさっきから人の事を“ナッポー” “ナッポー”と」

「ん？ああ、悪い。ナッポー星人の方がよかったか？」

蒼は少しずつ立つのに疲れてきたのか片足重心で腰に手をあてる。

「いえ、僕は“ナッポー”につっこんでるんです！というか星人てなんですか星人て！」

「見事なナッポーだったからつい、な。その葉っぱの部分がアンテナでナッポー星と交信してるんじゃないのか」

「いえ、僕には六道骸という名があるんです！これは葉っぱじゃなく髪です！アンテナでもありません！」

「そ。つまんねーの。」

骸は息が上がり、ぜいぜい言ってるが蒼は澄まし顔でまた風船ガムを噛む。

「話を戻すぞ。こちらの条件を聞く気は？」

「わかりました。聞きましょう。」

「?????????。」

ニヤリと笑いながら蒼が言う。

「…そんな事が可能だと思ってるんですか。」

「アンタの髪型が可能ならこれだって可能だろ。」

「クフフ…。いいでしょう。契約成立です。」

「形だけでなく。だぞ」

「もちろんです。」

「感謝する。アンタと似た境遇の子だから心配することはないだろ

う。」

たがいにニヤリと笑いながら契約を交わす。契約方法は裏社会での一番重い契約。焼き印だ。

人に関わる事だし当たり前だろ。クロームの為ならなおさらだ。

「焼き印は」

「こちらで用意してありますよ。」

そう言い骸が焼き印を持つてくる。赤く燃えてる。

ジュウウウ

「つつ！」

さすがに蒼にも神経はあるわけで痛い。

ドクロのマークが手の甲側の手首につく。

その後骸も同じ事をする。

もちろん幻覚でない事を確認して、だ。

「…一つ聞いてもいいか。」

「なんですか。」

「何でここまでした？こちらとしてはありがたいが、お前からしたら見ず知らずの奴との契約だぞ。」

「…ただの勘ですよ。」

「そうか」

蒼は映画館から出て行く。

「犬。」

「あい。なんれすか」

「本当にあの人ですね」

「ほんとれすって！今度ばかりは！柿ピーも実は影からあんどき見

てたつしょ！？骸様に言つてびょん！」

「めんどい」

「クフフ…千種が否定しないという事は本当なのでしょう。強い者と契約を結んどいて損はしませんからね」

「あ！手みやげ渡すの忘れた！」
せっかく麦チョコ買ってきたのに。

「…蒼！」

少し控えめな声で呼ばれる。

「クローム！久しぶり♪」

「うん！…話して…何？」

クロームにはメールして初めて会った公園に来てもらった。メアドは初日に交換したんだ♪

「あのさ、明日から黒曜ランドに住んでみない？」

「…え？」

「いや、一人で住むわけじゃないよ？もちろん人がいるんだけど、クロームと気が合いそうっていうか…クロームもその人にたくさん教えてもらえることがあるかなって…」

上手く言えず、ポリポリ頭をかきながら苦笑い。

だがクロームも少し考えた後、顔を明るくして

「…うん。その人と一緒に住んでみる。蒼がそう言うんだし…悪い人じゃなさそう。…もともと黒曜ランドの近くに住んでたし…」

「そっか！良かった。いきなり知らない人と住むってのも変な話だから心配だったんだ。」

それじゃあ明日一緒にその人に会いに行くと約束し、別れる。

クロームも気に入ってくれるといいんだけど…

第22兩

オレ、骸に会う！（後書き）

こんにちは！

なんかめっちゃ長くなっちゃいまして…読みづらくて…

でも頑張りました！

蒼：長過ぎて飽きる。

ひどっ！ここまで読んでくださった方ありがとうございます。時間があつたらコメよろしくです！

蒼：毎回同じ事言ってるし。

…いいの…コメ欲しいんだもん！すごい励みになるんだもん！もうマジ泣きもんよ！

蒼：かわいそうな作者。

すみません、ありがとうございました…

第23兩

オレ、目覺ましにいらつくー！

あっさでっす、あっさでっす、あっさでっすよー！
あっさでっす、あっさでっす、あっさでっすよー！
あっさ「うるせー！ー！ー！ー！ー！」

バキヤ

「ハアハア…何だこりや。」

朝。蒼が起きたのはドラ もんの声だった。

ピ…ガガガ…やっと起きたね♪チャンチャン♪バチッ

そして今蒼の前にあるのは

無惨につぶれたドラ もん。

の目覚まし時計。

「みーかぁどーーーーー!!」

バン!

蒼がリビングのドアを開け放つ。

「あ。蒼。はよー。」

帝はとつくに起きてトーストを食っていた。

「何だよこの目覚まし!」

「ああ、それなんかヨーグルトの抽選出したら当たった。蒼に始めに試させてあげようと思って……って

あーーーーーーーーーー！ドラ もんーーーーーーーーー！」

このとき帝は初めて蒼の方を向き、蒼の手の上を見て絶叫。

「こいつのせいで目覚め最悪！」

「えー！ちよ、ええー！？このドラ もん昨日届いたんだよ！
？初日で！？」

「んじゃてめーこいつが何て言ったかわかるか！？」

『あつさでっす、あつさでっす、あつさでっすよー！』だぞー！？

しかもボタンの上から潰したら起きたと勘違いして

『やっと起きたね♪チャンチャン♪』だぞー！？うざってー！この上ねー！！』

「うん。それは壊して正解だった。」

「だろ」

そう言い、蒼がふいに時計を見る。

9：54

「うそだろ、もうこんな時間！？クロームとの約束が10：00だつてのに！」

蒼は急いで白い長袖に黒のパーカ、下にはジーパンを着、ジャムをつけたトーストをくわえ、家を飛び出す。

「あ、そうだ、帝！雲雀サンには『霧沢はインフルで休みです』って言つて！」

「あ、おい！そんな事言ったらオレが噛み殺されんだろ絶対！って聞いちゃいねーし……」

帝が見た先にはもう蒼はスケボーを持って出て行った後だった。

？公園？

「蒼…遅いな…」

クロームが時計を見る。

10:14

クロームは黒曜の制服できていた。蒼に買って貰った服もあったのだが初めて会う人だしという事で制服にした。

「事故とかに巻き込まれてないといいんだけど…」

…ガガガガガガガガガ

後ろの方から奇妙な音が聞こえてくる。

「クツロームウウーーーーー!!」

「…!蒼!」

奇妙な音は蒼の乗って来たスケボーの音だった。

「ごめん!ちょっとオレの目覚ましのせいで…」

蒼は上手くスケボーを止め、クロームに言う。

「うつん…全然平気…」

「そっか…じゃ行こっか。」

そう言い黒曜ランドに向かい歩いて行く。

？黒曜ランド？

「六道骸。この子が前言った子だ。」

骸はまたソファに座っていた。違うのは周りに柿本千種、犬がいることだ。まだ他の連中は来ていないらしい。

「犬」

蒼が呼ぶ。犬は自分が呼ばれるのが意外だったのか驚いた顔をする。

「麦チヨコ」

言い、コンビニの袋を放る。

「うつひょー！やったびょん！」

「正直ドッグフードと迷ったんだけど。」

さてと。本題いきますか。

第23兩

オレ、目覚ましにいらつく!! (後書き)

やった!一日に二つアップできた!!

第24兩

オレ、クロームの中継役になる？

「…クロームです。」

「霧沢蒼から話は聞きました。」

「よろしく願います。」

？
？
？

話をもたねーーーーー！どーするよ、でもまあ初対面だしクローム
もおとなしめの子だし当たり前前だけどさ！

「…おい犬！なんとかしろ！」

「!?!何しろってんだびょん!」

「~~~~何かあんだろ!ほらこの前のゴリラとか!」

「無理だっつの!」

蒼が犬を捕まえコソコソ言う。あの戦いから少し仲良くなった二人である。

犬が考えた末取った行動は…

「ム…麦チヨコ食べるびょん？」

つて麦チヨコかよ！

「おい何で麦チヨコ！？他に何かなかったのかよ！？」

「今手元にあつたのがこれだったんらし！」

「そらそーだわ！オレがさっきあげたんだもん！」

そんな事をギャーギャー言っていると…

「…ありがと。」

クロームが麦チョコを数個袋から取る。ちなみに袋はさっきから犬がボリボリ食ってたから開封済だ。

その後少し雑談をした。

な…なんとかなった…か？

「じゃ、クローム。オレは帰るから。この人達には戦い方とか教えてもらうといい。イタリア語とかも。いやになったらいつでもオレん家来ていいからな。」

「なんらお前シスコンの兄ちゃんかったの」

犬につっこまれる。

「うっせ。心配なんだよ」

「蒼！」

クロームに呼ばれ、振り返る。

「……ありがとう！……がんばるね！」

「いえいえ。がんばれ。」

そう言い黒曜ランドを出る。腕時計を見ると……

11:46

「昼前か。帝もまだ学校か。よし。迎えに行こー」

スケボーを走らせる。

「……んー。今日はお見合いの中継の人の気分がわかった。」

？学校前？

「着ーいたつと。」

蒼がスケボーを降りる。

「随分と堂々と遅刻するね。」

うわっ。この声は…前を見ると案の定雲雀がいた。

「なんてタイミングが悪い時にいんだよアンタ」

「風紀を乱す奴は…噛み殺す」

「ハイハイ。どっかに勝手に噛みついてろ。オレは迎えにきただけだから邪魔すんな。」

横をスルーし、門に乗って窓まで飛ぶ。

あー、この浮遊感が好きなんだよなー。とか思っているとすぐ窓枠の上。オレの場合しょっちゅう遅刻しそう（もしくはする）からいつもこの窓は昼まで開けといってもらってる。昼以降は多分来る気ない。

「帝ー。帰るぞー。」

担任はもういーやという顔で苦笑い。陽気でいい先生なんだけどねー。

「『帰るぞー』ってなんで？」

帝もこんな事もう慣れてるという顔。

「まあまあ、あとで言うから。」

帝の手を掴むなり窓から飛び降りる。

「え、ちょ、待っ、うお！」

問答無用と飛び出す。

「うおーーーーい！手掴まれたままじゃ着地もできねーよ！」

「あ。そっか。わり。」

蒼が掴んでいた手を離す。

「え？ちよ、おわつ、だからっていきなり離すなよ！」
よほど慌ててるのか言ってる事が支離滅裂である。

「よっと」

「いっつつつつ…」

蒼がまず着地し、その後帝が着地する。だが帝は少し失敗したらしく痛そうにしゃがみでる。

「だいじょぶか？」

「だいじょばない。」

「あそ」

「…ほつとくなら聞くなよ！」

「どーでもいいけど目の前にこわーーーーーい顔した風紀委員長さんが立つてるから逃げねーと」

蒼が帝の方を向き、にっこり笑って言う。

「え？」

今まで下を見ていた帝が初めて上を向く。

「神野帝。霧沢蒼はインフルで休みだつて言つてなかったかい？」

「ひ、ひいー！に、逃げげるぞ！蒼！」

「あーいよ！呂律まわってないし」

「
…
噛み殺す
…」

それを上から眺めていた山本達。

「ははっ。楽しそうなのな」

「そ、そうだね？」

「てめー何十代目に氣い使わせてんだよ！」

「ん？そうか？わり！」

決して席が近いわけではない3人が喋る。

「~~~~沢田！この問題解いてみる！」

「えーーーー！！オレ！？」

そら先生も怒るわな。

「（もう少しの辛抱。そしたらあいつはいなくなる…）」
哀れな少女。間違いにはいつ気づく？

「んで何でいきなり？」

「ん？ああ、言ってなかったか？」

雲雀を撒いたあたりでスケボーを停める。

「イタリア行くぞ！」

「はぁ！？」

第24兩

オレ、クロームの中継役になる？（後書き）

コメよろしくです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7854w/>

転生した先は...リボーン！？

2011年12月6日21時46分発行